

主は、生きておられる

Unser HERR lebt

2026 graph magazine vol. **67**

Unser
HERR
lebt

Unser
HERR
lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ3・3)

vol. **67** 定価100円(税込み)

福音メッセージ

- 4 不安からの解放 ゴットホルド・ベック
19 渇く者は来なさい ゴットホルド・ベック
26 主のもとへ帰りましょう 松本 昭二

13人の証し

- 35 私たちの国籍は天にあります 今川 三枝子
43 試練の後に差し込んだ希望の光 石塚 政道
52 いつも喜んでいなさい 石塚 愛子

～松山キリスト集会の兄弟姉妹の証し～

- 55 弱い者をいつも励ましてくださる方 亀田 春近
59 いつくしみと恵み 大野 令子
59 聖書の神様 宗田 聖子
60 今はわからないが、後でわかるようになる 上村 まき
70 一粒で二度美味しい 藤田 清子
72 主とともに歩む日々 藤田 佳美
73 暗闇から光へ——イエス様との出会い 城本 恵美子
77 父の残した言葉 南 尚佳
78 イエス様とともに 皆見 真知子
79 主のお約束 光藤 絢子

福音メッセージ

- 84 生ける神のしもべダニエル(1) ゴットホルド・ベック

不安からの解放

ゴットホルド・ベック

あなたがたは心を騒がしてはなりません。
神を信じ、またわたしを信じなさい。

(ヨハネ14・1)

最初に申し上げたいことは、イエス様が宗教とはまったく関係のないお方であるということudur。この集いは宗教の集まりでもなく、「キリスト教」を宣伝するためのものでもありません。イエス様を紹介するための集まりです。

イエス様は、「宗教を持ちなさい。キリスト教に入りなさい」とおっしゃったものではありません。「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信

じなさい。」とだけおっしゃいました。「キリスト教」ではなく、イエス様を信じることによって、人はイエス様を知るようになります、そしてあらゆる心配や、恐れ、不安から解放されます。過ぎ去ったことは、もう過ぎ去っています。問題は今からのことです。主である神様の呼びかけとは、「今までのことを忘れて、今日からわたしと親しく交わりましょうよ」と、そういう呼びかけです。人間的には考えられないことです。すべてを創造され、汚れを知らない全く聖いお方が、罪にまみれたわがままな人間と交わりたいと望んでおられるのです。

集会のある子供に聞いたことがあります。「イエス様はどういうお方?」。その子は「私のわがままをゆるすかた」と答えました。主イエス様は、命令したり、人間か

ら何かを要求したりするお方というよりも、人間のわがままを赦すお方です。主である神様は、次のように呼びかけておられます。

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅の^{くれない}のように赤くても、羊の毛のようになる。」
(イザヤ1・18)

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。
(イザヤ43・25)

考えられないすばらしい主である神様の呼びかけです。ヘブル人への手紙の著者は、旧約聖書から次のように引用しています。

わたしは、もはや決して彼らの罪と不法を思い出

不安からの解放

すことはしない。」

(ヘブル10・17)

先日、一人の非常に悩んでいる方とお話ししました。彼女はノイローゼになり、うつ病と診断され入院し、やがて退院したのですが、やはり回復していませんでした。そうです。買い物、掃除、料理も、何も家事ができません。そういう状態で一人の知り合いを通して家庭集会にいられたのです。集会の後、語られた聖書の話しについて、彼女はどうしても聞きたいことがあると言って三つのことを私に質問してきました。

ひとつは、「本当に希望はあるんですか?」、彼女はあきらめていたのです。どうせダメなのではないかと。二つ目は、「私が神に愛されているって、考えられないけど、本当ですか?」、本当だったら希望があるし、問題が解決されると感じたのです。三つ目は、「自分の過^{あやま}ちも、本当に赦^{ゆる}されるのか?」。大切な質問でした。「本当に希望があるのか?」「私も愛されているのか?」「私の過ちも赦されるのか?」。聖書の答えはすべて「はい」です。

彼女は話し終わった時、「希望が湧いて来た。うれしい」と言いました。

聖書を通して提供されていることは、あらゆる不安、あらゆる恐れ、あらゆる心配から解放されることです。解放され、赦される条件、それは、自分の本当の姿を知ることということです。

ダビデというイスラエルの王様は、すでに三千年前に次のように告白しました。

私は悩む者、貧しい者です。主よ。私を顧みてください。あなたは私の助け、私を助け出す方。わが神よ。遅れないでください。
(詩篇40・17)

このような心の態度を持つと、主はあわれんでくださり、受け入れてくださいます。ダビデは、当時の世界を治めた王の王だったのです。けれども彼は、傲慢になることなく、主の前にひざまずいて告白しました。「私

したのです。イエス様を心の目で見ることこそが大切です。

「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。」とイエス様はおっしゃいました。「わたしを信じなさい」。これは確かに大切な命令です。人間が命令すると、相手は必ず束縛され不自由になります。けれども主である神様が命令すると、人間は自由になり、幸せになります。イエス様は、「わたしを信じなさい」と言われたのです。「道徳的に高い生活をしなさい。宗教的にふるまえ」。あるいは、「わたしの教えをよく勉強しろ」ではありません。ただ、「わたしを信じなさい」とおっしゃいました。では、イエス様を信じるとは、いったい何を意味しているのでしょうか。それについて、これから七つのみことばをご一緒に見ていきたいと思います。

不安からの解放

私は悩む者、貧しい者です」、「もし、あなたがあわれんでくださらなければ、導いてくださらなければ、私はもうおしまいです」と。

聖書に提供された救いを得るために必要とされていることは、キリスト教に入ることでもないし、いろんな勉強をすることでもありません。主イエス様に出会ったパウロは、証しました。

私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。
(ガラテヤ1・12)

まことの救いの土台はひとつの教えではなく、上からの啓示です。光によって照らされると、人間は小さくなり、「あわれんでください、赦してください」と叫ぶようになります。大切なのはそれだけです。「ただイエス・キリストの啓示によって」私は救われたと、パウロは告白

1. たべること

イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。

(ヨハネ6・35)

ここで覚えてもらいたいことは、イエス様のみことばは決して教えではなく、ご自身の啓示そのものであるということです。「わたしイエスそのものがいのちのパンである。わたしイエスのところに来る者は、決して飢えることがない。わたしイエスを信じる者は、どんな時にも決して渴くことがない」とおっしゃったのです。イエス様そのものを受け入れる人は、心から満足し、絶えざる喜びを持つようになります。

わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれで

もこのパンを食べるなら、永遠に生きます。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。

(ヨハネ 6・51)

イエス様は「生けるパン」として、天からこの世に來られました。主である神から受けるものをイエス様が私たちに与え、私たちが永遠のいのちに至ることを主である神は望んでおられるのです。あなたは、もうすでにイエス様のもとに行っているでしょうか。イエス様は、「わたしのところに来る者を、わたしは受け入れます。決して捨てません」と言われたのです。イエス様のみもとに行くことこそが、最も大切です。

私は何十年前か前に、ある兄弟にひとつの歌を教えたことがあります。だいぶ昔のことでしたので私は忘れてしまっていました。ドイツの兄弟姉妹が御代田の福音センターに來られた時、突然、彼が食堂で歌い始めたのです。

ス様を自分のものにするのです。それによって、心の飢え渴きが完全に満たされます。エレミヤは、二千六百年前に次のように証ししています。

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。万軍の神、主よ。私にはあなたの名がつけられているからです。

(エレミヤ 15・16)

喜びが欲しいと思ったら、みことばを食べなさい。必ず元氣になります。聖書は、学校の教科書のように学ぶべきものではなく、幼子のように自分のものにすべきです。「聖書がこう言っているから、こういうことかわからないけれど、ありがたい、信じます」と。この単純な態度をとると、心は満たされます。こうした態度をとらずにいくら勉強しても、何にもなりません。

神の最大の敵はいつも聖書学者でした。なぜなら彼

不安からの解放

イエス様のところに行きなさい！ イエス様のところに行きなさい！

イエス様のところに行きなさい！ ただちに行きなさい！

聞いていた皆も歌いました。そしてドイツから來られていた姉妹は、国に帰ってこの時のことをある老婦人に話したそうです。そして、その婦人が救われたということです。不思議です。

大切なのは、「勉強しなさい、努力しなさい、立派になりなさい」ではなく、「イエス様のところに行きなさい」なのです。そうすれば、イエス様がいのちのパンとして、私たちの満たされない心を満たしてくださるのです。

「信じること」とは、ひとつの教えを信じ込むことではなく、イエス様のみもとに行くことです。それはみことばであるいのちのパンを食べ（吟味し）、自分のものとすることです。単に眺めることはありません。イエ

らは、自分はもうすでにわかっていると思いきや、いたからです。そうすると盲目になり真理が見えなくなってしまう。神は、人間の知恵で理解できるものではありません。神ご自身があまりに偉大であるから、私たちはいくら考えても想像することができません。信じることによってのみ心の目で見えるようになるのです。これと全く同じように、聖書のみことばを自分の力で理解しようと努力しても必ず壁にぶつかります。神はそれを許しません。自分の無力さを知っている幼子たちだけが救われ、幼子たちだけが天国に入ると言われたのです。多くの人々は、やはり聖書は理解できるものだと考えています。けれども、決してそうではありません。神の前に小さくなつて、「主よ、語ってください。光を与えてください」という気持ちを持って聖書を読むと、見えるようになります。そして解放されます。

あなたの飢えと渴きは満たされているでしょうか。満たされる秘訣は、主イエス様のみもとに行くことです。イエス様を信じることです。イエス様を食べ、自分

のものにすることです。イエス様を受け入れなさい。

2. したがうこと

イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」（ヨハネ 8・12）

ここでイエス様は「わたしは世の光です。」——原語では「わたしは世の光そのものです」——と言われました。「わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがない」と記されています。イエス様は「世の光」として、あなたのわがまま、あなたの過ちが、罪の暗闇から明るみになるように招いておられます。そしてあなたが、光の中にこのいのちを見い出すように呼びかけておられます。信じることは、この箇所を見るとイエス様に「従う」ことです。それを聞くと、「いやー、大変だ。従わなくちやならないのか」と、考える人もいます。でも、従う

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。
（詩篇 119・105）

ダビデが言っていることは、「あなたのみことばは私にとつてすべてだ。あなたのみことばによって、私は元気になる。あなたのみことばによって希望が湧いてくる。あなたのみことばによって、あきらめる必要がないことが確かにわかる。あなたは望みの神である」ということです。

3. とおるゝ

わたしは門です。だれでも、わたしを通ってはいくら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つめます。
（ヨハネ 10・9）

このみことばでイエス様は、「誰でも救われる。救われようと思う人は簡単に救われる」とはつきり言われ

不安からの解放

ことは、唯一の逃れ道なのです。

人間は迷える羊と呼ばれています。羊にとって唯一の救いとは、羊飼いの近くにいたることであり、羊飼いに従うことです。羊は方向感覚がなく、自分自身を守る力のないものであり、何を教えてもわからない動物です。ですから、羊にとつて唯一の救いとは、羊飼いの後ろについていくことなのです。それだけなのです。自分で計画を立てて、あれこれをやろうと思えば、いつか壁にぶつかります。

信じることは、イエス様に従うことです。あなたはイエス様に従う者なのでしょいか。あなたは光の中を歩んでいる者なのでしょいか。もしかすると、あなたは、自分の考えや心の動機を人に知られたくないと思っているのでしょいか。あるいは、知られるのに別に差し支えないと思っておられるのでしょいか。あなたは、本当のいのちの光を持つておられるでしょいか。

ダビデは、三千年前に次のように言ったのです。

ているのです。イエス様は「門」であり、道しるべではありません。救いに至る門そのものです。この門を通る人は、すなわちイエス様を通る者は救われます。人間はよく、生活の中で「救われた」、「助かった」と言います。でも聖書の救いはそういうものではありません。聖書の救いとは、一時的な問題の解決ではなく、罪の問題の解決です。時に、良心の呵責かしこによって、罪滅ぼしのために、どうしたらいいのか悩む人はたくさんいます。この問いに答えられる宗教は存在していません。けれどもイエス様は、ありのままの状態で、「わたしのところに来なさい。わたしは、救いにいたる門そのものです。わたしのところに来る者をわたしは決して、決して捨てません」と約束しておられます。

イエス様を信じることは、「イエス様を通る」ことです。通って入る者は「救われる」と、ここでおっしゃっています。あなたがまだイエス様のみに来ていないならば、今日そうしたいとは思いませんか。イエス様だけが救いに至る門であり、唯一の道です。イエス様を

通らずに主である神に至ろうとする人は、反対にあわれな奴隷になります。救われるとは、イエス様のもとに行くことであり、イエス様を通り、イエス様によって受け入れられることです。

4. いのれること

イエスは彼に言われた。「わたしは道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。

(ヨハネ 14・6)

これは、ある兄弟の書斎にかかっていたみことばです。彼は四十年間学校に勤め、それから四十年間、政治家として働きました。四十年も政治家として働いた人はあまりいないと思います。大概の政治家は自分のことばかり考えますが、彼は違いました。何度も彼の家に行きましたが、いつも悩みを抱えた人々が訪ねて来ていまし

た。彼は一円も要求しないで、全力で人々を助けようとした人でした。毎日聖書を読んでいて彼の書斎に、このみことばがかかっていたのが忘れられません。

その日、危篤状態になったという知らせでお見舞いに行ったとき、彼が、「先生、この世で一番、気の毒な人間はどういう人だと思いますか？」と、聞くのです。私は、「祈らない人だと思う。祈らない人は自分の力に頼って生きるしかないから、一番気の毒なんじゃないかな」と答えると、「俺もそう思う」と彼は言ったのです。

祈らない人、イエス様に頼ろうとしない人は本当にかわいそうです。教師をし政治家にもなった彼はイエス様こそが道であり、真理であり、いのちそのものであるとわかったのです。イエス様を通して行く者だけが、真理に至り、永遠のいのちを見出すのです。イエス様なしの道は偽りの道です。本当に心の目を開いて、イエス様を受け入れる者は、あらゆる恐れと不安と心配から間違いなく解放されます。

5. 死んでも生きる

イエスは言われた。「わたしは、よみがえります。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。

(ヨハネ 11・25)

これはよく葬儀のときに語られるみことばです。「死んでも生きる」と、葬儀の時に言えるのはすばらしい特権ではないでしょうか。死は終わりではありません。死んでから始まります。今の人生がすべてであるなら、創造主である神様はおかしい。けれども、決してそうではありません。イエス様は死の問題を解決してくださいました。わたしは、よみがえりであり、いのちであり、「わたしを信じる者は、死んでも生きる」と言われました。イエス様を信じる信仰、イエス様を心から受け入れることが、私たちを真の祈りへと至らせます。

不安からの解放

信じることは永遠のいのちを持つことです。「死んでも生きる」とは、永遠のいのちを持つことです。集会

の多くの人々は、「ガンになったのは良かった」と証しています。不幸になったのは本当に良かった、それによって本当のしあわせに出会ったと言う人々も大勢います。このように告白する人々こそが、イエス様のおっしゃったことは真理であると証明しているのではないのでしょうか。イエス様は、「わたしを信じる者は死んでも生きる」と言われました。

6. 良い牧者を知ること

わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。

(ヨハネ 10・11)

良い牧者とは、何かを教える者ではありません。良い牧者は羊から何かを要求する者でもありません。良い牧者は羊のために自分のいのちを捨て、つまり羊のた

めに自分自身を犠牲にすると、あります。このことはイエス様だけがお得意になります。完全な満たし、全き平安、本当の安全はすべてイエス様によってのみ与えられます。信じることはいいのだというようなことなのでしょう。信じることは、イエス様のものとなることであり、イエス様のものとなった人だけが、イエス様のことを真に知っているのです。

わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っています。また、わたしのものは、わたしを知っています。

(ヨハネ10・14)

「わたしのものは、わたしを知っています」とありますが、イエス様についての知識を得ることよりも大切なのは、イエス様ご自身を知ることです。「イエス様は私のために死なれた。イエス様は今も私のために生きておられる。イエス様は私のことを思っておられる。イエス様は私のことを心配しておられる。イエス様は私を愛して

いる」。イエス様を知って、そう確信できる人は本当に幸せです。

7. つながっていること

わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。：

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。

(ヨハネ15・1、5)

ここでイエス様は、「わたしはまことのぶどうの木」、「あなたがたは枝です」と言われました。イエス様が「ぶどうの木」で、イエス様を知って主イエス様とつながっている人は「枝」です。枝は、木とつながっていれば必ずうまくいくし、つながっていなければ、何をやってもむ

なしくて役に立ちません。この箇所で言えることは、本当の交わりを持って初めてぶどうの枝は実を結ぶのです。イエス様と結びついていない人は、残る実を結ぶことはできません。人間的には成功するかもしれませんが、しかし、本当の意味で実を結び、それが残らなければ、人間の努力はむなしと言わざるを得ません。

ここまで、イエス様を信じるとはどういうことか、七つのみことばを中心に見てきました。

「わたしを信じなさい」、これこそが、イエス様の私たちに對する呼びかけです。イエス様を信じることは、いわゆる人間の影響によってキリスト教に入ることを意味しているわけではありません。イエス様を信じることは、ある教会の会員になり、その組織に属することでもありません。イエス様を信じることは、聖書の知識を得ることでもないし、良い人間になろうと努力することでもありません。イエス様を信じることは、ありのままの状態で、イエス様ののもとに行くことだけなので

す。そしてイエス様を受け入れた者として、イエス様について行くことです。

イエス様を信じる者は、イエス様という門を通る者であり、父のみもとに行く人です。そういう人々は受け入れられ、永遠のいのちを持つようになります。そして結果としてイエス様ご自身を知るようになります。パウロはよく証したのです。「私は自分の信じている方をよく知っている。私は生きておられるまことの神に出会った者です」と。この確信は、ことばでは説明することができません。

ヨブもこの確信を持っていました。ある時、彼は自分のすべてを失ってしまったのです。その時まで彼は本当に恵まれた人でした。当時その地域で一番の富豪だったし、元気な子どもも十人持っていました。その全財産と子どもたちすべてを皆、一度になくしてしまったのです。さらに全身に悪性の腫物しゅぶつができて、いのちだけは助かりましたが、妻さえも、「あなたの神はそ

ういうものだ。神を呪いなさい」と言うようになりました。——「それでもなお、あなたは自分の誠実を堅く保つのですか。神をのろって死になさい。」(ヨブ2・9)——そして、友人たちも彼を責める者になり、彼はまったく孤独になったのです。それでも彼は、次のように告白していました。

主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。

(ヨブ1・21)

神が私を殺しても、私は神を待ち望み、なおも、私の道を神の前に主張しよう。

(ヨブ13・15)

私は知っている。私を贖^{あな}う方は生きておられ、後の日に、ちりの上に立たれることを。

(ヨブ19・18)

ヨブはどうしてこのような態度とることができたのでしょうか。「私は神の導きを理解できないし、どうし

てこんなに不幸になってしまったのかさっぱりわからない。けれども、神はわかっておられる。神は正しく決して意味のないことはなさらない。私は信頼し続けよう」と思ったのです。

ふつうでは考えられない態度ですが、生きておられるまことの神に出会った人は、このような態度をとらざるを得なくなります。これこそが、あらゆる心配から、あらゆる不安から、あらゆる恐れから解放されることです。イエス様をいのちのパンとして、世の光として、救いに至る門として、道として、真理として、いのちとして、またよみがえりとして、良い牧者として、ぶどうの木として知ることこそが、もつとも大切なのではないのでしょうか。それによって重荷から解放されます。

最後に数か所、みことばを読んで終わります。

だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりして

はいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもので、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。

空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。

(マタイ6・25、26)

「心配すること」とは最も愚かなことです。いくら心配しても何にもなりません。「空の鳥を見なさい」と主イエス様は言われます。

ピリピ人への手紙で、パウロは刑務所にいて囚^{とら}われの身でありながら、まことの満足を得た者として、自由の身の人々に次のように書きました。

いつも主にあつて喜ばなさい。もう一度言います。喜ばなさい。あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。何も思い煩^{わづら}わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、

あなたがたの願ひ事を神に知っていただきなさい。
(ピリピ4・4〜6)
初代教会の代表者のひとりであるペテロは次のように書きました。

あなたがたの思い煩ひを、いつさい神にゆだねなさい。
神があなたがたのことを心配してくださるからです。

(1ペテロ5・7)

神が心配してくださっているのに、自分でまた心配するのはなぜでしょうか。こんな愚かなことはないでしょう。全能なる神が心配してくださるのですから、思い煩う必要はありません。

私たち一人一人のために、自分自身を犠牲にされたイエス様が次のように呼びかけておられます。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのと

ころに來なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが來ます。

(マタイ11:28、29)

また、イザヤは次のように告白しました。

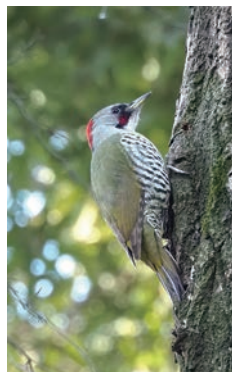
見よ。神は私の救い。私は信賴して恐れることはない。ヤハ、主は、私の力、私のほめ歌。私のために救いとなられた。あなたがたは喜びながら救いの泉から水を汲む。

(イザヤ12:2、3)

イザヤも、ペテロも、パウロも、みな恐れと、不安と、心配から解放された者として、主をほめたたえることができたのです。私たちも、單純に、幼子のようにイエス様に頼ると、同じような心構えを持つことができるようになります。「わたしを信じなさい」と、主は今日も

呼びかけておられます。

あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。(ヨハネ14:1)



渴く者は來なさい

ゴットホルド・ベック

渴く者は來なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。

(黙示録22:17)

聖書は人間に与えられている最高の宝物です。天国に行っても、おそらく新しい聖書は必要ないでしょう。イエス様は「この天地は滅びます。しかし、わたしのことは決して滅びることがありません。」(ルカ21:33)と言われました。永遠に残る聖書のことばに頼ると間違いありません。

一か所だけお読みします。パウロという男の書いたことばです。いろいろな事で悩むようになった人びと

渴く者は來なさい

を励ますために、力づけるために書かれたことばです。

どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように。(ローマ15:13)

聖書がどうして書かれているかと言いますと、今の箇所にも書いてあるとおり、「喜びと平安と望みを自分のものにするため」です。

主イエス様ご自身が望みの源みなもとそのものです。どんなことが起こっても、永遠に変わらない「望みの神イエス様」が生きておられる限り、前向きに生活することがで

きるのです。

このイエス様は確かに理解しにくいことを沢山言われたのです。

一つは、「死んでも生きる」。いったいどういうことでしょうか？

愛する姉妹は召されました。けれども、愛する姉妹の霊と魂は私たちよりもずっと元気です。悩みもない、病気もない、弱さもない、孤独もない、幸せです。だめな者が残されているのではないのでしょうか。

人生とはそんなにもしろくない。人間は悩む者です。だいたい皆、孤独病にかかっているのです。そして今の目に見える世界は、人間の心を満たすことができません。

けれども、「望みの神」であられる主イエス様に頼ると、元気になります。前向きに生活することができのです。「本当の幸せ」とは、自分の心を満たすお方、すべての問題を解決できるお方を、知ることなのではない

もしちょっとだけ、今日、ここに來ることができれば、必ずこう言うでしょう。

「皆さん、天国はすごい！言葉がない。けれど、どうして私が天国に入れたのか、さっぱり分らない。イエス様があわれんでくださったからです。私はごめんなさい。あわれんでください、という気持ちになった結果、天国に入っちゃた」と喜んで言うでしょう。

人間は過ちをおかす者です。不完全です。けれども、この人間から、何も要求されていません。イエス様に救っていただくために大事なことは、キリスト教に入らなくてもいい。教会に行かなくてもいい、勉強しているいろいろなことが分らなくてもいいのです。「神さま、ごめんなさい」。そういう砕かれた気持ちだけで十分です。だから、ありがたいのではないでしょう。

良い行ないも、いかなる努力も自分自身を救うことはできません。ただ、主イエス様のみが、救いをもたら

渴く者は来なさい

でしょうか。どうしてかと言いますと、自分の問題はその方によってのみ、解決されるからです。すべての問題を解決できるお方とは、もちろん人間ではありません。天と地を材料なしで、無からお造りになったお方です。

聖書全体の呼びかけとはどういうものであるかと言いますと、

「悔い改めて信ぜよ」。「へりくだればOK」ということです。

聖書は確かに厚い。千何百ページあります。けれども内容的には難しくありません。

神様にへりくだり、「ごめんなさい、あわれんでください」と、そういう砕かれた気持ちだけで十分です。決して知識ではありません。

そして愛する姉妹も「あわれんでください、助けてください、赦してください」と思うようになったから幸せです。

すことができるのです。どうしてかと言いますと、主イエス様が私のすべてのわがまま、過ちを贖う救いの代価を払ってくださったからです。

いったいどうして、この世に多くの苦しみ、また欠乏があるのでしょうか。

どうして、いたるところに問題があるのでしょうか。

苦しみがあるのでしょうか。

なぜ多くの孤独に悩む人々がいるのでしょうか。

聖書の答えは「必要だから」という答えです。悩みがなければ、苦しみがなければ、人間は心を開こうとしません。心から助けを求めようとしません。そして求めなければ、与えられないし、助けを求めなければ、助け主を知ることができないからです。主イエス様を体験的に知ることが、すべてのすべてです。

主イエス様は、人間ひとりひとりの罪滅ぼしのために、犠牲となられたのです。イエス・キリストの死は、いわゆる殉教者の死ではなく、私たち人間の受けるべき

天罰でした。

「イエス様が罰せられたから、人間を罰する神はいない！」

これはすごいことです。キリスト(救い主)が罰せられたからです。イエス様は、へりくだってみもとに来る者を決して捨てられません。

そしてイエス様は、最善の時に召してくださいさるのです。愛する姉妹は高齢のため、病気のためというよりも、主が呼ばれたからです。「愛する姉妹、もういいだろう。おいで」そしてだめになった体から霊と魂が出ちゃった。それだけです。死は終わりではありません。

結局、人間の視野はあまりにも狭いので、私たちは多くのことをいくら考えても理解することができません。けれども、主なる神は決して過ちをおかしません。私たちは理解できないことが沢山あるとしても、主は私た

ちひとりひとりにとって、最善を考えていてくださるのです。それも私たちにはピンと来ません。どうして私たちが愛されているのか、わかりません。

神の愛を受ける資格のある者は一人もいません。けれども、イエス・キリストの代わりの死こそが、私たちが愛されている証拠です。

次のことを考えるべきではないでしょうか。

いったい、なんのために人間は生きるのでしょうか。

人間は、死後、どこに行くのでしょうか。

もし神がおられるなら、今日もなおご自身を啓示なさるのでしょうか。

ちっぽけな人間は唯一のまことの神を本当に知ることができのでしょうか。

すべての人の心の支えになるのは、自分の努力ではありません。

すべての人は「永遠の目標」を必要としているし、「としえの喜び」、また「本当の平安」を必要とします。

一人の真剣な学生が次のように尋ねました。
「私が救われるために何をすべきかを、私に単純に、そしてはっきりと言うことができる人はいないのでしょうか？」

一人の大学の教授はまた次のように問いを出しました。

「イエス・キリストを信じ、心に受け入れるためには、私は何をすべきなのでしょう？」

一人の政治家は次の様に告白しました。

「私はもうだめ。私は生ける神を必要としている。

どうしたら私は神を見出すことができるのでしょうか？」

一人の囚人は次のように尋ねました。

「私の罪が赦されるために、私は何をすべきかを説明してくれる人はいないのでしょうか？」

私は天国に行くという確信を持ちたいのです。」

これらの問いはすべて、人間の心の奥底の求めやあ

喝く者は来なさい

こがれについて語っています。人間の心のあこがれは、この目に見える世界によつては、決して満たされません。主なる神のことばである聖書は素晴らしい福音です。今日もなお、「本当の平和、満足、喜び、そして安全がある」と、聖書は私たちに呼びかけています。人間は心のむなしさのために、造られた者ではありません。

私たちが必要としているのは、新しいものでも、近代的なものでもなく、「心を満たしてくださいさる本当のもの」です。偽物はけっこうです。あらゆる人が作った宗教の提供しているものは、ぜんぶ偽物です。偽物を得るために、またお金が必要なのです。笑い話です。

本当の宝物とは、「罪の赦し」、「神との平和」、「変わらない喜び」、「本当の平安」です。どれもお金で買えないものです。イエス様はぜんぶ、ただで与えたくて与えたくてしかたがないのです。

人間は、絶望し、意気消沈し、不幸で、良心の呵責に

責められ、情欲にかりたてられ、自己追求に支配されても、この世に来てくださったイエス様を心に受け入れることによって、こうしたことから解放され、「新しい人」に変えられます。

「救われる」ということは、この主イエス様の愛を体験することです。愛する姉妹も素直に信じました。「私は大した者ではないけれど、私は生けるまことの神さまによって愛されている」と素直に信じることができます。

傷ついた心は、解放され、いやされるべきです。

頑なになった心は、主イエス様の愛によって克服され、新しくされるべきです。

満たされない心は、この世に來られた主イエス様によって、満たされるべきです。

もっとも大切なことはなんでしょう。もちろん健康でもない、たくさんのお金でもない、権力また名誉でもありません。大切なのは、罪の債務から解放され、そし

て主なる神さまが私のわがままを赦してくださり、永遠のいのちを与えてくださった、という確信を持つことです。

キリスト教に入って、がっかりして離れた人はいっぱいいます。けれどもイエス様にだけ頼れば、後悔する人は一人もいません。イエス様だけが本物の神様だからです。

外的な生活をしなくなれば、失格者になりたくなければ、また実を結ぶ生活をしたいと望むなら、イエス様の次の約束を信じてもらいたいです。すなわち、私たちのために、十字架の上で死なれ、そして復活なされ、「わたしのもたらなさい」と呼びかけておられるイエス様の前に頭を下げ、へりくだり、牧者であるイエス様に導いてもらい、イエス様のために生きたいと望むなら、あふれるばかりの祝福が与えられます。

今日の葬儀がきっかけとなって、出席してくださった愛する皆様おひとりおひとりが、イエス様を信じることによって変えられ、すなわち、悩みながらも喜ぶこ

とができ、問題を持ちながらも平安に満たされることができ、そして生き生きとした希望をもって将来に向うことができますように。

あとがき

この小冊子は、ベック兄がある方の葬儀の場で、聖書から語られたものです。

「人生において、本当に大切なものは、死の直前の三十分前においても、なお重要な意味を持ち続けているものだけである」

ということばを聞いたことがあります。

すべての人に救われてほしい、との願いからまとめました。

どうぞイエス様に直接お話しくださればと祈っております。

（編集者より／本冊子に掲載する際、一部書き言葉とさせていただきます。）

渴く者は来なさい

祈り

愛する主イエス様

私のわがままのために、代わりに罰せられ、死なれたことを感謝致します。

あなたの流された血によって、すべてのあやまちが赦され、忘れられていることも感謝致します。

あなたを信じますから、死んでからさばかれることがないことも感謝致します。

あなたを信じる者は、死んでも生きると約束されていることも感謝致します。

死ぬことは終わりではありません。あなたと一緒になることです。

私の国籍は天にありますから感謝致します。

今からのことすべて、あなたにおまかせいたします。

主イエス様の御名によってお祈り致します。

アーメン。

主のもとへ帰りましょう



まつもと しょうじ
松本 昭二
(名古屋キリスト集会)

初めに、神が天と地を創造した。

そして神は、「われわれに似るように、われわれのうちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

そのようにして神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によかった。こうして夕があり、朝があった。第六日。

こうして、天と地とすべての万象が完成された。

(創世記1:1、26、27、31、2:1)

私たちの罪と罪からの解放

初めに、主なる神が天と地を創造され、私たち人を特別な愛のうちに造りになり、他の生き物にない優れた能力を持たせてくださいました。けれども、最初の人アダムとエバは、「食べてはならない」と言われた木の実を食べ、神に逆らう罪人となってエデンの園から追放され、この世をさまよう者となったのです。私たちもその性質を持っています。私たちは与えられた優れた知性と自由意志を自分だけのために使い、主なる神を認めようとせず、神に背を向け、自分の幸せを求め思うがままに歩んできたのです。そのことが聖書で示さ

れる私たちの大きな罪であり、「すべての人は罪を犯した」と言われるゆえんです。また、人として醜いところは自分が正しいとする高ぶりや、人と比べてしまう心、妬みや人を悪く思ってしまう心など自分を中心としているのです。そんな罪人の私たちでありながら、主なる神は、その責めを私たちに負わせることはなさいませんでした。

私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあつて、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。…しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。キリストこ

そ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。

(エペソ2:3〜5、13〜15)

主なる神と私たちとの間には、私たちの罪という大きな壁があります。その隔ての壁を御子イエス様が十字架に架かってくださり、流された尊い血によって取り除いてくださったのです。罪の赦し、罪からの解放とイエス様とともに新しく生ける道を、主なる神が用意してくださったのです。私たちが神様に近づいたのでなく、神様の方から近づいてきてくださり、イエス様の十字架のみわざにおいて神様との平和を与えてくださっているのです。そして、その平和を私たちが受け取るように導かれているのです。

すなわち、神は、キリストにあつて、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことは私たちにゆだねられたのです。

主のもとへ帰りましょう

(2コリント5・19)

イエス様によって差し伸べてくださっている救いの御手を受け入れるか受け入れないかは私たちにかかっている、主なる神は言われるのです。「私は、きょう、あなたがたに対して天と地とを、証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいを、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。」(申命記30・19)と明言されています。イエス様によって、すでに隔ての壁は取り除かれているのですから、何も障害はありません。「私のような者が…」などと躊躇することなく、イエス様の前に出れば良いのです。「さあ、あなたは神と和らぎ、平和を得よ。そうすればあなたに幸いが来よう。」(ヨブ22・21)

「神と和らぎ」とは、神を主と認め、主の前に静まることです。静まることによって、私たちは自分がどんな者であるのかを知り、神のご愛を知るように導かれ、かつて経験したことのない平安をいただくようになります。なぜなら、主のみこころは、イエス様を信じる者を救わ

く、私たちをきよめてくださり、イエス様の恵みの中に招き入れてくださり、永遠のいのちへ導いてくださるのです。

イエス様の愛の導き

私たちは、子供の頃から自分のことは自分でしなさい。目標を持ってそれをやり遂げなさい。努力して良い人になりなさい。などと教育を受けて来ました。物事を真面目に一生懸命取り組みことは人として必要なことのように思います。けれども、どれだけの人が思い通りに歩めるでしょうか。多かれ少なかれ悩みを持ち、もがきながら歩むのが私たちです。今、まさに試練の中にあり、何をどうしてよいかわからず、出口も見えず、涙の日々を過ごされている方もおられるでしょう。そんな私たちにイエス様は愛をもって語りかけてくださいます。

主のもとへ帰りましょう

れ永遠のいのちを与えることにあるからです。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

(ヨハネ3・16、17)

私たちの信仰の土台は、「世を愛された」とあるように、すべての人を、この私のことも神が愛してくださっていることであり、主なる神の愛によって、イエス様が私たちに与えられ、イエス様ご自身の死を通して私たちのすべての罪を解決してくださった。そして、イエス様を信じる者には永遠のいのちが約束されていることです。「御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。」(1ヨハネ1・7)とあります。「私たちをきよめます」ということは単に罪が赦されたということだけではな

あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。主は決して、正しい者がゆるがされるようにはなさない。

(詩篇55・22)

私たちは、自分の身に大きな問題が起こされると、なぜこのことが起きたのかと原因を探します。これはあの人のせいだとか、仕事のことであれば上司の方が悪いとか、またあの時私がこうしていればこのことは起こらなかったなど、人のせいにするか、自分を責めるかのどちらかです。こうして、私たちは迷いの道に陥ってしまうのです。けれども、「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」(イザヤ43・4)と言ってくださるイエス様は、私たちの悩みも涙も、すべてを知ってくださるのです。

主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩み

と私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。ことは私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。

(詩篇139・1～4)

イエス様は、いつも私たちに目を注いでくださり、心配してくださり、すでに問題解決への道も備えてくださっているのです。自分の頼りない熱意をもつてあがいても、人やこの世の富に頼つても、問題解決にならないことは自分が一番よく知っています。主への信頼とは、イエス様へ心に向ける者には必ず報いてくださる。このことを信じ、イエス様の恵みを静かに待ち望むことです。私たちが、イエス様が支えてくださることを覚えるとき、今まで大きな重荷と思っていたことも重荷とは思わなくなり、自然と解決へ導いてくださいます。私たちの目の前の現実と私たちの望みとの間には大きなギャップがあります。そのギャップもイエス様を信頼し、待ち望むことにおいて越えられていくのではない

対処方法は、次のみことばです。

何も思い煩^{わづら}わないで、あらゆるばあいに、感謝をもつてささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあつて守ってくれます。

(ピリピ4・6、7)

イエス様は、私たちの素直な心の求めを待っておられます。イエス様は多くの奇跡を人々の前で行われましたが、盲人の目が見えるようになったのも、病人を癒^いされたのも、彼らの素直な心の求めを見られたからです。今すぐ、イエス様のところへ自分の心の思いを持って行きましょう。必ず、私たちの心へ何かが与えられます。優しい神の平安を知るようになるに違いありません。この世の宗教は、良い人間になるように人の努力を求めます。けれど、私たちの神イエス様は、今涙する人、

主のもとへ帰りましょう

でしょうか。

私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にいる道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。

(ピリピ4・12)

私たちの人生の歩みは、その環境や境遇によって大きく左右されます。私たち自身の力ではどうにもならないことは多いのです。けれども人生の歩みを決めるのは今置かれている環境よりも、むしろ私たち自身の選択によるところがより大きく、私たちが何を選ぶのかにかかっているのではないのでしょうか。大使徒と呼ばれるパウロは「あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。」(ピリピ4・12)と言っています。それは、イエス様に祈り、頼ることなのです。自分の思いに頼らず、イエス様の視点から進むべき道を示されてこそ、あらゆる境遇に対処する力と方法を与えられていくのです。その

悲しむ人へ、「あなたはあなたのままで、わたしのところへ来なさい」と導かれるのです。そして、高ぶらず、へりくだり、落ち着いて静まっている人を喜んでくださるのです。

立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。

(イザヤ30・15)

私たちがすべきことは、自分であれこれ考えて心を騒がすことを止め、落ち着いて静かにすることです。「信じない者にならないで、信じる者にならなさい。」(ヨハネ20・27)とあるように、イエス様は必ず報いてくださることを信じ、静かに待つことです。そうすれば必ず答えをいただけます。なぜなら、みことばによって約束してくださっているからです。

次に、イエス様が喜ばれることで、へりくだって悔い改め、イエス様から救いをいただいた人を見てみま

しょう。

ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。「神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫^{かんいん}する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。」ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。「神様。こんな罪人の私をあわれんでください。」あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。

(ルカ18・10～14)

取税人はその立場から人々をだまし、ゆすり、多くの

終わりに(私たちの人生の目的)

イエス様が律法学者の質問に命令として答えられました。

イエスは答えられた。「一番たいせつなのはこれです。『イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』次にはこれです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』この二つより大事な命令は、ほかにありません。」

(マルコ12・29～31)

「あなたの神である主を愛せよ」とは、私たちが具体的にどうしていくことでしょうか。それは、私たち一人ひとりが神であられるイエス様と、正しい関係でしっかりと繋が^{つな}がっていることだと思います。私たちがすべき

主のもとへ帰りましょう

罪を犯してきましたが、神様に祈るとき、自分のありのままの姿を表わし、自分がこんな者であることを素直に認め、神様の前にへりくだったのです。「神様。こんな罪人の私」と言っているところに悔い改めの心が表わされています。パリサイ人のように行ないは立派であっても高ぶる人は義と認められず、取税人が義と認められ救いを受けたのです。同じように、イエス様と一緒に十字架につけられた犯罪人のひとりは、「われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」…「イエスさま。あなたの御国の位^{くわい}にお着きになるときには、私を思い出してください。」(ルカ23・41、42)と言い、最後に、イエス様を神と認め、自分の犯してきた罪を悔い改め、イエス様によって救われたのです。イエス様は、「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」(ヤコブ4・6)と言われるように、へりくだった人を喜ばれます。救いの条件は、「こんな私」とへりくだってイエス様のところへいくことです。

ことは、イエス様のお名前を呼び、祈ることです。悩みを打ち明けることも、感謝も、賛美も、自分のことばでイエス様と会話を重ねること、イエス様への信頼は増し加わり、イエス様のご愛をより深く知っていくけるように導かれます。そして、祈りによって色々なことを学び、必要なことが与えられます。これは不思議なことですが必ず経験されるときが訪れます。イエス様との正しい関係とは、イエス様は、私たちの創造主であり、私たちひとり一人は主のものであって、その主の愛のうちに留ま^{とど}まっていることです。イエス様のご愛を知っているけば、自然と隣人へも愛ある繋が^{つな}がりとなっていくのではないのでしょうか。

私たちの人生の目的とはなんでしょう。健康で優雅に暮らし、この世の富を得ることでしょうか。たとえ成功といえる人生であっても、永遠のいのちを得られなければ意味ある人生と言えるでしょうか。私たちは、神によって造られたものであり、その神であられる主のもとへ帰ることが、私たちにとって最も大切に、最

高の幸いです。その幸いとは、イエス様にある永遠のいのちです。

その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。
(ヨハネ17・3)



私たちの国籍は天にあります

今川 三枝子



ご主人の務さんと

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。
(ヨハネ3・16)

夫、今川務^{つむ}は人生のゴールデンテープを切って天国に召されて逝きました。八十三年の生涯でした。誤嚥性肺炎^{ごえんせいはいえん}をおこして入院し、いつ召されてもおかしくない状況でした。我が家にどうしても帰りたいとの強い夫の願いでした。我が家に帰って一か月後に召されました。その間、私は「務さん」と呼んだり「パパ」と呼んだりしながら「五十一年間ありがとう。ありがとう」でした。口のきけなくなった夫は、私の手をギュッと握り返してくれました。

二〇一四年十一月三日午前三時二十分、長男達司、妻由紀の見守りの中で、パッと目を見開いて深く深呼吸吸

をして「ハイ」と言っているかの様にして召されて逝き
ました。

イエスさまを信じて救いを受けて共に歩んだ四十年
でした。夫は幼少の頃、父親が重度の脳梗塞をおこして
働けなくなり、家族の助けのために夕刊だけ新聞配達
を毎日、雨、風、雪の日も六歳の時から働いたそうです。
ちょうど遊びが面白くなっている時にやめて帰らなけ
ればならなかったということを一度だけ聞いたことが
あります。

まことに、御怒りはつかの間、いのちは恩寵おんちようのうちに
ある。夕暮れには涙が宿っても、朝明けには喜びの叫び
がある。
(詩篇30・5)

夫の好きなみことばでした。

二〇一〇年一月三十日、三十八年間守られて兄弟姉

妹の祈りと奉仕によって続けられた滝山家庭集會が閉
じられました。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、
あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあな
たがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あな
たがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりま
せん。
(ヨハネ14・27)

私は一九四一年(昭和十六年一月三十日)に群馬県太
田市で生まれました。六人兄弟の五番目で、兄が二人、
姉が二人、私と弟の六人です。

両親は二十五年前に母住枝(八十四歳)が召され、そ
の一年後に父種吉(九十三歳)が召されました。(証しが
『光よあれ』第四集に載っています)

私が物心の付いた時は戦争中でした。毎日空襲があ
り、空から飛行機で爆弾を落とされるのです。真つ暗闇

の中、山に逃げるのです。洋服を着たまま寝るのです。
父親の仕事が飛行機工場の暗幕あんまくの販売でしたので生活
は豊かだったようです。でも戦争中ですから空襲の激
しい所ばかりに移住しているかのようなのです。

終戦になって両親は疎開していた愛知県から東京に
出て来ました。

子供心に東京は一面焼け野原で、大変な所に来てし
まったと思いました。母は寝込んでしまうほどで、生活
が一変してしまいました。

小学校一年生になり通った学校も焼失していて青空
教室という状況でした。友だちもまだお父さんが戦争
から帰ってこない人が何人もいました。

世の中の貧しさをよく覚えていますが、両親は明治
生まれの人で戦後の生活の大変な中でも伸び伸びと育
ててくれました。

伝さん(長兄の伝一。キリスト集會の兄弟でした)は
狭い家に友だちをよく連れて来て泊めるのです。母は

「両親も兄弟も戦争で死んで一人ぼっちなんだよ。可愛
そうに」と言っていました。そんな時だけ白米を炊いて
食べました。「いいな、伝ちゃんは何がいて」と友だちに
言われたようです。姉たちにもそのようなお友だちが
いました。子供心に私は「家族がみんないて良かった」
と想ったりしていました。

戦後の貧しい中、みんな一生懸命生きている時代でし
た。よくお米がなくなつて私の友だちのお米屋さんに
お米を借りに行かされました。その頃は家族の人数に
応じて配給という時代でした。世の中、みんな精一杯で
生きていました。

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の
使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は
彼らを贖あがない、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来ら
れた。
(イザヤ63・9)

イエス様は人生の終盤で、両親を天国に召してくださいました。

父は、天に召される前に、イエス様にお会いしたら、先ず礼拝して「住枝はどこにいますかと聞くよ」と伝さんと義姉の康姉妹に言っていたそうです。太平洋戦争もあつたりした時代に両親は六人の子供をひとりも欠かすことなく育ててくれました。これは大変なことだったと思います。主に感謝いたします。

主イエスさまが私に目を留めてくださいましたのは小学校四年生の時でした。家の近くで「土曜学校」というのが開かれていて、お姉さんが歌を教えてくださいました。それは、「行きぬ、行きぬ、行きぬ——心の重荷は行きぬ——」という歌でした。私にも心に重荷があるということに初めて気付き、このことが私の成長と共にいつも心にありました。

した。自分の中に不安定という重荷がありました。

幼子でさえ、何かするとき、その行ないが純粋なのかどうか、正しいのかどうかを明らかにする。

(箴言20・11)

聖書のことをもっと知りたいと思い、近くの教会に行ってみました。ちょうど、牧師さんの奥様にお会い出来、私と同じくらいのお年頃でした。聖書のことを知りたいと、子育ての不安などのお話しをすることが出来、家に帰ってくると、私の義理の姉(池田康姉妹)が待っていて、驚きました。「三枝ちゃん、あなたそんなに聖書のことが知りたいなら、節ちゃん(妹の飯守節子姉妹)の行っている吉祥寺キリスト集会に行ってみたら? 今度、特別伝道集会というのがあるから」と知らせに来てくれたのです。行ってみると、十人程の婦人の方々が集まっていました。

13人の証し

Unser Herr lebt

イエスさまの救いにあずかり、信仰をもったのは三十四歳の時、子育て真最中の時でした。当時、幾日も、連合赤軍浅間山荘事件に関するテレビ放映が続いていました。当時大変な事件でした。銃を発砲している学生の母親は息子に向って、「早く出て来て!」と呼びかけていました。この母親もわが子が幼い子供だった時は、この様になるなどとは夢にも思わなかったでしょうに。一流大学に入った学生がこうした学生運動がきっかけで、果てがこのような事件になってしまったと思うと、私は子育てが不安になり、考え込むようになりました。世の中の風潮に知らず知らず押し流されながら生きている自分を考えるようになりました。この事件がきっかけで、自分が子育てをしていく上での、人間の常識ではない、生きるための真理を知りたいと思いました。

五歳の娘から、「ママは昨日は『いいよ』と言ったのに、今日はだめだってどうしてなの?」と言われ、不安で

メッセージがあり、「台所にも神さまがいる」というテーマで、聞いているうちに心が静まっていくのを感じたことを今でも覚えています。「また、わたしはここに來ます」と心の中で言っていました。

13 people

志の堅固な者を、あなたは全き平安のうちに守られます。その人があなたに信頼しているからです。

(イザヤ26・3)

それから私は毎週子供たちを連れて、日曜学校の時間から礼拝に行くようになりました。

しかし、夫を誘っても「行かない。いやだ」と言うのです。それでも毎週吉祥寺キリスト集会前まで送ってくれました。そのうち、夫はだんだんと不機嫌になって行きました。「そんなもの信じないで、オレを信じろ」とさえ言うのです。「もちろん信じているわよ、でも次元が違うのよ」と言うと言々怒らせてしまいました。

そんな時、近所で子供たちが仲良くしてもらったお宅の、三人目の赤ちゃんが亡くなりました。ママは悲しみに沈み、夕方私が子供たちを迎えに行くと、いつも泣いているのです。なぐさめる言葉もなくなりましたが、私もただ「幸ちゃん、幸ちゃん」と呼んでいました。人の心をいやしてくださることは神さまにしかできないと思います、集会に行きはじめてばかりでしたけれど、ベックさんに話してみました。「すぐに伺いましょう」と言ってくださいました。彼女はすぐには会ってはいませんが、やっとお会いすることになり、ベックさんはご自分の証しをしてくださいました。日本に宣教師として奥様と来られ、二人目のお嬢さんを赤ちゃんの時に亡くされたこと、今は天国でイエスさまと共にいること、一番すばらしいところにいると話してくださいました。ママは幸ちゃんが天国にいると確信したようでした。三人でお祈りをするとき悲しみが喜びに変えられました。

この事がきっかけとなり、滝山の家庭集会が始まりました。

その後、小川康徳兄(召天)、麗子姉ご家族、岩上勲兄(召天)、桂子姉ご家族それぞれがイエスさまを信じ、救われて吉祥寺キリスト集会に集うようになりました。

私の両親にもイエスさまの「救い」の話をしました。両親はビックリして私たち夫婦に何か問題が起きてそんなものを信じたのかと問い詰められました。「信仰なんて人に勧めるもんじゃない。第一今川さんに悪いじゃないか。近所の人を集めてキリスト教を勧めているのか」と当時大変な怒りようでした。もちろん兄たちや姉たちにも知れ、大変な騒ぎになりました。(でも人生の終盤で兄や姉たちも信じて天国に召されていきました)

我が家で家庭集会をするようになってまだ間がないときのこと、家庭集会が予定されていたある朝に、私は

ベックさんに、「今日は皆さんが来ませんので」とお断りのお電話をしました。ところが幼稚園の用事を済ませて帰ると、家の前でベックさんが待っているのです。ビックリして家に入っていたきました。私は落ち着かなくてお茶を出したりして椅子に座りました。しばらく沈黙が続きました。「どうしたら…。どうしよう。どうしよう」と心の中はひっくり返っていました。

私はベックさんに「私がどうして家庭集会をしなればならないのですか?」、と少し泣きそうになりましたが感情的に言いました。ベックさんは「主のためです」とはつきりおっしゃいました。それだけでした。

さらに私が「ベックさん、イエスさまを信じる信仰ってどういうことですか?」とお聞きすると、「罪の悔い改めです。人間、死なない人はいないでしょう。天国に望みを置くことです。聖書を読むこと、祈ること、証しすることです」とおっしゃいました。私はその頃悩んでいたことをお話ししました。話しているうちに、自己

中心で自我の強い自分が見えてきて、それ以上、話しをすることができなくなり、心の中に大きな罪が黒い塊かたまりになっていくことに気付かされました。「三枝子、祈りましょう」と言われ、ベック兄が祈ってくださいました。私も悔い改めの祈りをしました。涙があふれました。お帰りになる時、「三枝子、これは本物だよ。全部イエスさまのせいになればいいよ」とおっしゃいました。それは全部イエスさまにゆだねていけばいいということだったのでしょうか。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。

(1コリント1:18)

夫は、持ち前の優しさで、我が家の子供と近所のお子さんたちを日曜学校に毎週車に乗せ往復してくれました。待っている間、日曜学校の先生のお話しも聞いて

たりしていたようです。その頃、軽井沢で年に三回、バイブルキャンプがありました。主人はその時、イエスさまを信じる信仰者になりました。

今川三枝子（いまがわみえこ）

一九四一年（昭和十六年）群馬県太田市生まれ

終戦後、東京に移住し、杉並第六小学校、杉並区立阿佐ヶ谷中学校、富士見ヶ丘学園高等学校、東京八重洲大丸百貨店、大丸興業就職

一九六三年（昭和三十八年）今川務と結婚

長男 達司（たつし）、妻 由紀（ゆき）

長女 遠藤陽子（ようこ）、夫 学（まなぶ）

孫三人



試練の後に差し込んだ希望の光

石塚政道

生まれた地

私は、一九五六年、茨城県の西部にある小さな田舎町で生まれました。バス停や鉄道の駅からは遠く、交通の便は決して良い地域ではありません。父の事業の失敗により、現在、私の生まれたこの家は他の人の手に渡り、故郷はありません。この辺りは今もそれほど変わってはいませんが、その当時から緑豊かで、田んぼがあり、畑があり、林があり、また小川があり、近くには利根川も流れています。春には木々の緑と美しい草花が咲き乱れ、夏は蟬取りや川での魚釣り、秋にはキノコ採り、冬はその当時、まだ雪もよく降っていました。このような自然豊かな田舎町で、農業を営む家の二人兄弟の次男として生まれました。二人が生まれる前、最初の子の長女は風邪をこじらせ、一か月足らずで亡くなっています。

クリスチャンとなった経緯



政道さんと愛子さん（中央のお二人）、ご家族と

私がキリスト教に初めて触れたのは、小学生の頃でした。近くにクリスチャンのおばあさんがいて、クリスマスになると近所の子供たちを集め、ツリーを飾り、聖書のお話を聞かせ、プレゼントを配り、子どもたちとひと時を過ごすのが、毎年の恒例行事となっていました。その集まりに参加したのが、キリスト教に触れた最初の体験でした。その時はまだ、私自身、ただ集まるのが楽しみなだけで、「アーメン」と言う時に、ふざけて「ラーメン」と大きな声で言ったことを思い出します。また、そのおばあさんの家とは少し離れていましたが、同じ地域でただ一軒、熱心なクリスチャンホームがありました。土曜日になると、やはり子供たちを集めてキリスト教のお話をしていました。私自身は、「この文明の発達した時代に神様などいるはずはない」と思っており、まったく馬鹿^{ばか}げているとしか考えていませんでした。しかし、そんな中でも、何故かそのような集まりごとの好きな自分は、面白半分か興味半分か、誘われるがまま

に土曜日にそこで行なわれている話を聞くようになりました。知らず知らずのうちに、純粋な子供心は、聖書の話に惹^ひきつけられていきました。私が十二歳、中学一年生の時です。それからほどなく、その土曜日に集会が行われている家の長男で、同じ学校に通う一つ年上の先輩が、毎週日曜日になると、町の中心部にある教会に私を誘ってくれるようになりました。当初は少々疎^そましいとは思っていたのですが、興味を持ち始めていた私は、毎週誘われるままに、その町の中心部にある教会にも通うようになりました。今思うと、本当にその先輩に感謝すると同時に、何よりも、先輩を通して導いてくださった神様に感謝しています。その教会では、土曜日に通っていた集会とはまた違う、講壇から語られる本格的な聖書のメッセージを聞くことができました。今までに聞いたこともなく考えもしなかった、聖書の真実に目が開かれていきました。

初めに、この世界はどのようにして造られたのか？

人類はどのようにして誕生したのか？ 目に見える全てのものは何のために存在しているのか？ などなど、全ての疑問に対する回答は、神を信じる者たちを通して書かれた「聖書」にあることを教えられたのです。進化論は仮説であって、いまだに科学的に証明されていないこと。また、世界的に見るならば、進化論よりも創造論の方が、むしろ大勢を占め、優位に立つ見方や考え方であり、あえてこの二つを論証するならば創造論の方が辻褄^{つじま}が合い、合点が行くことなどを知らされたのです。

このような創造論の観点から、人類最初の男女アダムとエバを造られたのは神であって、その目的は、神と親しい交わりをもち、この世界のすべてを人類に支配させるためであったことを知りました。また、なぜ知性を持った人間の女性が、大変な苦しみをして子供を産まねばならないのかという疑問については、女性であるエバが神の戒めを破ったために、その身に及んだ当然の

罪の結果だったことも分かりました。

次は、大空にあの美しい七色の虹がなぜ現われるのかについての疑問です。それは、神が造られた人類が罪を犯して神のもとを離れ去り、その後、あまりにも多くの罪を犯し続けたため、神は人を造ったことを悔やまれ、ノアという神に忠誠を尽くした家族以外はすべての人々を洪水によって滅ぼしてしまった後、洪水から救われたノアが神に対して行なった行為によって、神が人類との間に結ばれた約束の印として大空に虹を現わしたものと知りました。その行為とは、洪水が収まり、救われた喜びに満たされたノアが、神の前に感謝と畏敬^{いび}の念を込めて祭壇を築き、その上で全焼のいけにえを捧げたことでした。そして、それをご覧になった神が、そのなだめの香りをかがれ、「もう二度とこの地を洪水によって滅ぼすことはしない」と誓われた神の契約のしるしとして、神が大空に掲げたものが虹だったのです。

またなぜ、地球上にこれほどの言語が存在するのかも分かりました。それは神が人間に対し「生めよ。ふえよ。地に満ちよ。」(創世記9・1)と言われた戒めを破り、一箇所に集まり天にもとどく建物を立てようとしていた人間の傲慢^{ごうまん}さを打ち砕くため、人々の間に神がさまざまな言語を造り、会話を混乱させることにより、建築を諦めさせて人類を全地に散らされるためであったことも知りました。

最後に、究極的な人間の疑問である「なぜ死ななければならぬのか? 死んだらどうなるのか?」という疑問です。それは、神によって造られた人類は、永遠に生き続けることができた存在であったのに、神の戒めを破ったために、罰として死ななければならなくなったこと。そして、神から離れ、神を無視して自分勝手に罪の世界を彷徨^{さまよ}歩いた結果、死んだ後、当然の報いとして裁きを神から受けなければならないこと。そうした人類を、あわれみ豊かな神は、神と人間の間を取り持つ仲

して最終的に、疑うことなく、理解し、信じ受け入れました。

言い知れぬ喜びと感謝と感動が私を包み込み平安に満たされ、感極まる経験をしました。それまでに経験したことのない驚くべき体験でした。このようにして神は、私の幼き日に、人の知性では到底理解できないことを、その一方的なあわれみによって語りかけてくださり、理解する知恵を与え、悟らせてくださったのです。毎週講壇で語られる説教を聞くと、いつも感激で胸がいっぱいになりました。「こんな世界があったんだ、本物の世界があったんだ、すべての解決はここにあったんだ、人間の立ち返るべき魂の故郷はここだったんだ、これは大発見だ、もうこれしかない」と思いました。私は、この素晴らしい救いを伝える伝道者になろう、結婚などしなくてもいい、この信仰の中で生きていこうと思いました。まさに、私はこの救いの確信で満たされていたのです。その後、牧師から洗礼を受けたい人がいるかと

介者としてその愛する神のひとり子イエス・キリストをこの地上に遣わし、人類が負わなければならない罪の刑罰を、キリストが身代わりとなって十字架のうえで神の裁きを受けることにより、人類を救おうとされたこと。そして墓に埋葬され、三日目に神のひとり子イエス・キリストは、人類が長い間縛られていた死を打ち破って勝利し、よみがえってくださったこと。そして、このことを信じる者、すなわちキリストの十字架の贖^{あがな}いと復活を信じる者は、人類が立ち返るべき魂の故郷である父なる神のもとに立ち返り、死んだ後も、永遠の天国に行くことが出来るのだということを知りました。しかし、イエス・キリストを知ろうとしない者や、またイエス・キリストの救いを聞いても信じない者、従おうとしない者は、永遠に絶えることなく燃え続ける地獄の火の中で苦しまなければならないこと。などなど、純粹な十二歳の子供の心は、毎週通う教会の礼拝メッセージの中で語られる聖書の話を徐々に受け入れ、そ

の促^{うなが}しがあり、うれしさと感激でいっぱいなのは、洗礼を受けたいと牧師に伝え、受洗する決心をしました。

そのころの私は、学校の部活では器械体操をしており、中一でありながら、その地区の大会の種目別の床運動で第二位という成績を収め、かなり有望視されておりました。将来はこの素晴らしい救いを伝える伝道者、かたやオリンピック選手になろうと夢は大きくふくらんでいたのです。友達を教会に誘い、学校の作文にも自分がクリスチャンであることを証しし、先生たちもそのことを知っていました。その当初の私の信仰は、救いの喜びと神に仕えようとする溢れ出る思いが、自分の中で最高点、最高潮に達していたように思います。まさに私は、希望に燃えながら伝道者という道に向かって邁進^{まいしん}しようとしていたのです。

信仰の挫折

しかし、そのような思いも束の間、洗礼を受けると決

意したその日、家に帰り、両親に洗礼を受けたいとの話を伝えると、それまで教会に行くことを許してくれていた両親は、一変して、もう絶対に教会へは行っていないと、猛烈に反対をしてくれました。当時十二歳の自分としては、なす術がありませんでした。通っていた町の教会から遠いことに加え、牧師や友人が誘いに来ても、親は頑として受け付けませんでした。受洗の日にも予定通り牧師が迎えに来てくれたのですが、父はものすごい剣幕でその牧師を追い返したのだそうです。このことは後に、久しぶりに会った牧師から聞いて知ったことでした。その時の父としては、わが子が訳の分からない外国の宗教であるキリスト教にのめりこみ、わが子が奪われてしまうのではないかと、必死の抵抗をしたのだと思います。これは、私にとつての、信仰をもつてからの最初の大きな神からの試練であり訓練でした。そんな中、私の中で浮かんできた思いは、「もうちょっと後になってから信じよう」という信仰からは

かけ離れた思いでした。こうして、私はこのような思いに支配され、この素晴らしい救いから離れてしまったのです。結果、この世に舞い戻り、以前のような生活を再開してしまいました。一度この素晴らしい救いを知った者が、それをないがしろにする時、聖書のみことばは私に次のように語りかけます。

主であり救い主であるイエス・キリストを知ることによつて世の汚れからのがれ、その後再びそれに巻き込まれて征服されるなら、そのような人たちの終わりの状態は、初めの状態よりももっと悪いものとなります。

(2ペテロ2・20)

その後、このみことばの通りのことが私に起こってしまったのです。それは、中学二年生の時の授業中のことです。私は、窓際の前から三番目ぐらいの所に座っていました。すると突然、頭が真っ白になり、空っぽになりました。

その後、このみことばの通りのことが私に起こってしまったのです。それは、中学二年生の時の授業中のことです。私は、窓際の前から三番目ぐらいの所に座っていました。すると突然、頭が真っ白になり、空っぽになりました。

思考回路がおかしくなったような、また、感性が消滅したような、考えられない状態に陥ってしまい、パニックになってしまいました。大声を出したい衝動に駆られました。なんと自分自身を抑え込みました。その時から、私の頭の状態、精神状態が一変してしまっただけではないかと思えます。イスラエルの初代の王様サウルも、神から離れた後、錯乱状態に陥ったことは、旧約聖書に書かれてある通りです。このような状態に陥る前の私は、ここからは少し自画自賛になってはしまいますが、作文能力や、友達を笑わせること、人の心を読み取る読心術もたけており、その場の空気を読みとり、クラスの中でみんなをまとめあげるムードメーカー的な役割もはたせるマルチ少年だったように思います。しかし、それら全てが半減してしまっただような感覚に陥ってしまったのです。先に掲げた聖書のみことばのようなことが起こらないように、この素晴らしい救いを知った者は、たとえ親の反対があつたにしても、信仰の道から

決して離れるべきではなかったのです。

この悲惨な体験をした後、私は、数えきれないほどの罪咎のさすらいの日々を送り続け、その結果、私を待っていたのは失敗だらけの壮絶で悲惨な人生でした。それは、私が神から受けるべき当然の報いとしての懲らしめでした。今思うと、救いの喜びを感じていたのは、十二歳の時のほんのわずかな期間だったように思います。

話は戻りますが、親に反対された後、悶々とした中で、中学、高校生活を終え、その後、大学受験に失敗し、私は就職で親元を離れ、束縛がなくなった状態となりました。そこで、初めに経験した強烈な救いの喜びの体験がどうしても忘れられず、就職先だった愛知県岩倉市にある近くの教会に通い始めました。しかし、かつての祝福に満ちた救いの喜びはすでに消え去っており、その後は、教会に行ったり行かなかったりの喜びのない中途半端な信仰生活を繰り返すようになってしまいました

話は戻りますが、親に反対された後、悶々とした中で、中学、高校生活を終え、その後、大学受験に失敗し、私は就職で親元を離れ、束縛がなくなった状態となりました。そこで、初めに経験した強烈な救いの喜びの体験がどうしても忘れられず、就職先だった愛知県岩倉市にある近くの教会に通い始めました。しかし、かつての祝福に満ちた救いの喜びはすでに消え去っており、その後は、教会に行ったり行かなかったりの喜びのない中途半端な信仰生活を繰り返すようになってしまいました

13人の証し

Unser Herr lebt

た。仕事を何度も変えましたが、それら全てがごとごとく失敗に終わり、結婚をしますが、妻とのいさかいが絶えず、子育てもうまくいきませんでした。二番目の子供が妻の体内に宿ったのですが、稽留流産のため二か月余りの経過の後、体内で亡くなっていました。このようなじめな状態になってしまった私は、詩篇51篇のダビデの祈りの中にあるような「救いの喜びと喜んで仕える霊を私に返してください」という叫びにも似た祈りを何年も続けたのです。

結婚からキリスト集会に集うまで

ここで、私たち夫婦について少し証しさせていただきます。私たち夫婦は、千葉県茂原市にある教会の牧師が主催しておられた紹介所で知り合い、一九八五年九月に、当時私の所属していた教会で式を挙げました。婚約式は、家内の所属していた茨城県的那珂湊キリスト教会にて行ないました。那珂湊キリスト教会はベック

宣教師が、ドイツのリーベンツェラー伝道会の宣教師として来日し、最初に赴任した教会です。亡き義理の母（飛田ふゆ）は、この教会の近くに住んでおり、この教会で洗礼を受けています。義理の母と妻は、後にベック兄が設立した今のキリスト集会に移ることになります。その後、私自身も何年もの教会生活に行き詰まりを覚え、二〇一〇年の六月から正式にキリスト集会に集わせていただいております。

信仰の復活と使命

話は戻りますが、詩篇51篇のダビデの祈りの中にある「救いの喜びと喜んで仕える霊を私に返してください」という祈りを繰り返しながら、信仰の挫折を嫌というほど味わった私は、ここ最近になってやっと、アンドリュー・マーレーの著書『キリストの御霊』を読み解くうちに、御霊なる神の素晴らしさを知り、それを体験的に知ることにより、信仰の回復（リバイバル）を経験し

ます。

つつあります。やっと長年の間迷い続けた霊的な闇の中から抜け出し、新たに差し込んだ光に照らされ、再出発の信仰の道が開かれたのです。最後に、なぜ今このような私が神のあわれみによって生かされているかを表わしたみことばをご紹介して私の証しを終わらせていただきます。

主は私をきびしく懲らしめられた。しかし、私を死に渡されなかった。
（詩篇118・18）

主よ。私は、あなたのさばきの正しいことと、あなたが真実をもつて私を悩まされたことを知っています。
（詩篇119・75）

私に残された信仰の生涯は、聖霊なる神の素晴らしさを知った私が、立ち直って次のみことばを実践することが神から与えられた使命であると思わされている。

目をさましなさい。そして死にかけているほかの人たちを力づけなさい。わたしは、あなたの行ないが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。だから、あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。それを堅く守り、また悔い改めなさい。もし、目をさまसानければ、わたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない。
（黙示録3・2、3）

これが現在の私自身に与えられているみことばです。クリスチャンが多くの実を結び、勝利するためには、イエス様が父なる神にお願いして信じる者たちにお与えてくださった「助け主」聖霊なる神の助けが必要不可欠であり、この方に頼らなければ決して神に喜ばれる信仰生活を送ることはできないことを、今、心から実感

しています。

いつも喜んでいなさい

石塚 愛子

石塚 政道（いしづか まさみち）

一九五六年四月一日 茨城県猿島郡境町生まれ

境町立境第二中学校卒

茨城県立境高等学校（普通科）卒

茨城県立三和高等技能専門学校（電気課）卒

妻 愛子（あいこ）

娘 出浦 結実（でうら ゆみ）

娘婿 出浦 晶弘（でうら まさひろ）

いつも喜んでいなさい。…これが、キリスト・イエスに
あつて神があなたがたに望んでおられることです。

（1テサロニケ5・16、18後半）

始めに、私のために祈ってくれたキリスト教会の牧
師と兄弟姉妹に感謝します。

夫が集っていた教会で結婚式や交わりをさせていた
だきました。牧師と兄弟姉妹に感謝します。

先に天に召されたキリスト集会の國川雅子姉妹とは
五、六年文通させていただきました。姉妹のハガキを受
け取るのが感謝で楽しみでした。

私は、四十代の初めに精神を患いました。その後、初
夏の「ドイツ喜びの集い」への参加に導かれました。

苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました。
しかし今は、あなたのことを守ります。

（詩篇119・67）

二〇一六年十二月からスーパーのレジでパートで働
きました。出勤する前に祈り、メモを読む必要がありま
した。職場では良い人にも恵まれました。けれども夏休
みに高校生がアルバイトに入らず、きつかったです。

二〇一七年の四月に、佐倉市白井の介護施設に母が
入居しました。パートで働いていた私の代わりにA姉
妹が、母のもとを訪れ、賛美や祈りをしてくれ感謝でし
た。同居していた娘が私に良くしてくれ、金銭的にも守
られました。

私たちの結婚は、「クリスチャン生活事典」という本
の中で解説してある通り、結納を交わさない結婚でし
た。今振り返ってみると、母が介護施設に入居している
時、私は頭痛がひどく、夫が代わりに洗濯物を施設に届

けてくれました。この結婚のことは、主の導きだったと
この頃気付き感謝しました。

主の導きで祈ってくださった秋津の祈り会と印旛の
祈り会の姉妹に感謝します。

あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキ
リストにあつてその永遠の栄光の中に招き入れてくだ
さった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみの
あとで完全に、堅く立たせ、強くし、不動の者として
くださいます。

（1ペテロ5・10）

主に信頼し、主を頼みとする者に祝福があるように。

（エレミヤ17・7）

石塚 愛子（いしづか あいこ）

茨城県那珂湊市立那珂湊中学校、県立勝田高等学校、

13人の証し

Unser Herr lebt

尚美学園基本科ピアノ専攻、(株)柿沼時計
千葉県佐倉市在住

夫 政道（まさみち）



松山キリスト集会の皆さん、亀田さんはテーブルの右から5人目

「松山キリスト集会の兄弟姉妹の証し」

弱い者をいつも励ましてくださる方

亀田 春近
かめだ はるちか

私は一九五〇年に愛媛県新居浜市にいへまで五人兄弟の末っ子として生まれました。性格はわがままです。その性格を隠すように、強がつて生きてきたように思います。その結果は家庭を壊すようになりました。そのような私にぴったりのみことはが聖書にありました。

…不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫かんいんをする者、男娼だんしやうとなる者、男色なんしよくをする者、盗む者、貪欲どんよくな者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。
(1コリント6・10)

このような者がイエス様の事を知るようになったの

は、家族の勧めでした。私は、妻と長男、長女、次男の五人家族でした。私が四十歳くらいのころ、家族は日曜日のたびに教会に行っておりましたが、私はこれ幸いと遊びに夢中になっておりました。

当時、私は十人程の設備会社に勤めておりました、昼は現場の仕事、夜は書類の作成で遅くまで仕事をしておりました、そんな中で女性問題を抱え、妻にも、相手にも大変申し訳ないことをしました、このように自分の好きなことをしているのに喜びは薄れ、重荷として感じるようになっておりました。そのような時に次男が「父さん、一緒に教会へ行こう」と誘ってくれたのが始まりでした。今思うと「神の祝福のないことは重荷となる」、まさにそのとおりでした。

あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です。(1ペテロ2・10)

私の仕事は上下水道工事をしており、そんな関係でその物件を見に行きました。一戸建てで、母と一緒に住むのにちょうど良い家でした。母は私が六歳の時に夫(私にとっては父)を亡くし、長い間一人でアパート暮らしをしておりましたので母と一緒に住むことにしました。そして私が家を出て二年目に長女の恵子が、その二年後に次男の智也が私のもとにきました。

長女に次いで次男が私を頼ってきたときに、私の取った行動により傷つけた家族への罪が神様の前に赦されたのではないかと思えました。慰めを受けたと思います。

集会に集うようになって、まだまだ、いわゆる「サレンダークリスチャン」ではなかったでしょうか。このころ、救われた確信というよりも、ただただ神様があわれんでくださっていると感じていました。信仰をもってから八年くらいが過ぎていたと思います。その間もイエ

教会に家族で集うようになり、周囲との付き合い方が変えられ、付き合いが悪くなったと言われて失うものがあると思っておりましたが、何も失うものではなく、仕事も友人も変わりませんでした。

毎週日曜日には礼拝に集い、家族と同じ価値観を持って生活しておりましたが、教会生活が四年目のころ、その教会に行くのが苦しくなりました。そこで、私だけそれまでの教会を離れ、キリスト集会に集うようになりしました。それは家族にとって裏切りに等しい行為だったと思います。

家族には私が教会を離れたことで非常に残念で悔しい思いがあつたと思います。やがて一緒に生活することが難しくなり、私が家を出ることになりました。

新しく住む家を探し始めた時に、取り引き先の社長から「中古の家を買ったのだが借家にしたいので見て欲しい」と依頼がありました。当時も今もそうですが

ス様の守りがあつたのだと確信します。そして、集会の兄弟姉妹の励ましも支えになりました。私の性格からして八年も頑張ることはできません。

あなたがたの思い煩いを、いつさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。(1ペテロ5・7)

キリスト集会に集うようになったのは、神様のあわれみだったのか、自分の意思だったのかはつきりとわかりませんでした。今は神様によって、主のあわれみのゆえに、松山キリスト集会に移されたと思っております。松山キリスト集会では、日曜日の礼拝と福音集会の後、家族のように過ごすことができます。それぞれ、寂しさや、心配事をもちながらも、互いに励ましを受けて帰ります。

神様は、私たちが住む所や時間さえ、神を知るためだ

と言われます。辛さの中にも神はおられ、喜びの中にも神はおられます。つらいときに耐える力を神様は与えてくださいました。

先に書きましたように、長女の恵子と次男の智也が私のもとに來たのは、彼らも教会に行けなくなつて、母親と一緒に生活できなくなつたようです。今は、少し信仰から離れているように思えます。二人の信仰の回復を切に願っております。また、長男の忠之とは、二十五年ほど会うことができていません。長男の今後の導きを祈りつつ、和解を切に願っております。

ここで少し、私がまだイエス様を信じる前の思いを書かせていただきます。

その当時は、人は死ですべてが終わると思えておりました。ですから家族から聖書の神様の話を聞かされても、いつも反対をしておりました。また、クリスチャンになると日曜日ごとに教会に行かなければならず、自分の自由な時間がなくなると思っておりました。け

れども一度だけ、国家資格を取るときに祈ったことがあります。祈りの対象は聖書にあるまことの神様でした。「神様、私がこの試験に受かりましたらクリスチャンになります」今振り返ると恥ずかしいですけど、その時は真剣でした。試験は受かりましたが、教会へ行くまで、それから三年が過ぎておりました。私が神様を忘れても、神様は私を覚えておられたのでしょうか。

見よ。わたしは手のひらにあなたを刻んだ。あなたの城壁は、いつもわたしの前にある。（イザヤ49・16）

神様の前に自分の正直な思いを封じたままで終わらなくて良かったです。

主は情け深く、あわれみ深く、怒るのにおそく、恵みに富んでおられます。主はすべてのものにいつくしみ深く、そのあわれみは、造られたすべてのものの上にあり

ます。主よ。あなたの造られたすべてのものは、あなたに感謝し、あなたの聖徒はあなたをほめたたえます。

（詩篇 145・8〜10）

いつくしみと恵み

おのれいこ
大野 令子

もしあなたがたがこの世のものであつたなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえつてわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。

（ヨハネ15・19）

感謝！感謝！

八十一歳の私を主はここまで導いてくださいました。悲しみ、苦しみ、寂しさ、喜び、賛美、すべて味わい尽

くし、今はみことばに支えられて、平安な日常生活です。
あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。（1ペテロ1・8）

聖書の神様

なぬだ
宗田 聖子

聖書の神様を、深く知らないまま現在となっています。集会の兄弟姉妹との交わりや聖書の輪読などの機会を続ける事で、みことばを少しでも、わかっていきました。

しかし、わかりません。
そんな私ですが、理解できることが一つありました。

13人の証し

Unser Herr lebt

「祈る」ことでした。

祈るとは、簡単だけど、とても難しいことでもあると、
交わりの中で知りました。

心を尽くして主に抛り頼め。自分の悟りにたよるな。
あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうす
れば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

(箴言3・5、6)

今はわからないが、 後でわかるようになる

上村 まき

救い

高校生の時、人生の目的や死後について悩むようにな
りました。既に聖書の信仰を持っていた家族からだ

けではなく、当時未信者だった弟からも「人生で一度
会っておく価値がある人」と勧められ、日本語が流暢な
ドイツ人の宣教師さんに会い、聖書の話聞きました。
話のあとで一緒に祈りすると、何故か「聖書の神様が、
天地万物の創造主だ。その神様に私は愛されている」と
思い、嬉しくなり、悩みがどこかへ去りました。

しかしその後、新約聖書を読み、バイブルキャンプに
も行きましたが、知りたいと思う「罪、十字架、罪の赦
し、救い」が分らず、信じるために個人的に出逢うべき
だと思っていた「イエス様」にも「主」にも出逢えず、漠
然とした「聖書の神様」だったので、信仰を持てずにい
ました。

高校を卒業する頃、突然「イエス・キリストに従うと
は、どういうことか」ということばが湧いて来て、「神様
に何も話さないで勝手に物事を決めてきたこと、神様
を無視して生きて来たことが罪だ。イエス様が十字架

で死んでくださり私の罪は赦されたのだから、死後に

天国に行ける」と思えました。私は自分が罪人であるこ
とを実感し、罪の赦しと救いの確信を得ました。漠然
としていた「聖書の神様」が、それからは私の個人的な
「主」となり、私の救い主「イエス様」に出逢え、信じる
ことができ、これからは何でもイエス様に祈って相談し
ようと思いました。父なる神様の同じ子供なので、年齢
に関係なく、クリスチャンの男性は「兄弟」、女性は「姉
妹」と呼ぶことも知りました。

英語が苦手だったので、大学は二次試験に英語がな
い関東の学校だけを受験しました。「受験の時は、是非、
我が家に泊まって」と言ってくださっていた横浜のY
姉妹のお宅にお世話になりました。そのお宅で聖書の
話を聞く家庭集会有り、高知医大(現・高知大医学部)
のご出身で、大学で聖書を読むサークルを通して聖書
の信仰を持ったという方に会いました。

大学は落ちましたが、祈った結果、授業の半分が英会

話のキリスト教系の短大へ進学できました。

入学すると先生方や同級生の中に、救いの確信を
持った姉妹方やアメリカ人の先生がおられました。聖
書の信仰の話は、互いのことばが流暢でなくても通じ
ることと、クリスチャンという方でも罪の話をされな
い方とは日本語で話しても話がかみ合わないことの両
方の体験を通し、内に住んでくださる聖霊の働きの大
切さを知りました。

祖父とE先生との不思議な出会い

すでに亡くなっていた仏教の僧侶だった父方の祖父
や、神道の神主だった母方の曾祖父が天国に行ってい
るのか気になり始めている頃でした。

祖父は住職をしつつ夜間中学で教員アルバイトをし
ていた兼業住職の時があったのですが、短大の理事で
高知医大の名誉教授でもあったE先生も戦後すぐ祖父
と同じ職場で教員アルバイトをされていたという事が

わかりました。

それを知ったE先生が「あなたのお爺さんのお陰で、私の今の信仰があるのよ!」と、話し始められました。

「私の嫁^{とこ}ぎ先は日蓮宗の家で、その家で戦争未亡人となった私は長男の嫁として日蓮宗を守るべきなのか、でも私はクリスチャン。いったいどうしたらいいだろうか」と迷った挙句^{あげく}、職場の同僚の日蓮宗のお坊さんでもある先生(つまり私の祖父)に尋ねたら、『日蓮宗は死んだら「無」という考え。仏のために何かしなきゃとか、生きている誰かが日蓮宗を守らなきゃならないとか、そんな必要はない。あなたがクリスト信仰をやりたいなら、おやりなさい。』と言ってくれて、それで聖書の信仰を続ける決心ができたの。その後、高知医大では『聖書を読む会』もでき、何人かクリスチャン・ドクターが生まれたのよ」と話してくれました。そのクリスチャン・ドクターのお一人が、横浜のY姉妹のお宅の家庭集会で出会った高知医大出身の方でした。祖父は、数十年前に

日々でした。心療内科へ通い一年半すると元気になり、集会での礼拝や仕事に少しずつ行くことができるようになり、海外へ家族旅行やバイブルキャンプへ出かけ、フルタイムで働けるまでに回復しました。

しかし、その数年後、うつ病が再発し退職。心療内科に入退院を繰り返すようになり、礼拝にも行けなくなりました。家族は相変わらず病気に理解があり、毎朝家族で礼拝をし、入通院させてくれ、私に「家事を手伝ってくれて助かる」と言って、生活費や治療費に困ることなく同居させてもらえました。病を理解してくれる、同じ信仰を持った家族の中で、イエス様に感謝して日々過ごしていました。しかし、私は初めて自殺を図ります。悩み事も困り事もなく、恵まれた環境を有難く思い、心療内科の治療を受け、そもそも「死にたい」など思っ

た事がない…なのに、自殺を図る事があるのだと知り、尿も致死量以上の出血をし、意識を失った時、尿も

既にイエス様のお役に立てていたと知り、嬉しく思いました。

うつ病発症

二十歳で就職し東京に出て、吉祥寺の近くに住み、歳の近いクリスチャンの友人もたくさんでき、たまには海外出張もあり、楽しい日々でした。しかし過労でうつ病になり、二十六歳で退職。四国の実家で両親と同居することになりました。

当時はまだうつ病を「根性の足りない人がなる病気」と誤解する人が多く、クリスチャンの間でも「治すのは医療ではなく信仰だけであるべき」と考える信者も多くいた時代でした。けれども両親は「根性や不信仰の問題ではなく、ストレスが原因で起きる病で、適切な療養が必要である」と正しく理解し、私を受け入れてくれました。

家族で毎朝十分間ほど礼拝して一日が始まる感謝な

便も失禁した状態に陥り、助からない可能性もありましたが、外傷も後遺症もなく助かりました。また元通り家事手伝いをし、イエス様と家族への感謝の日々が始まりました。

繰り返す再発と悪化

三十四歳の時、突然左半身が動かなくなり救急搬送。それ以降、午後になると左半身が動かなくなり、物事の手順がわからず、多くの事が出来なくなりました。

数か月後、遠方のうつ病専門のストレスケア病棟を受診すると「典型的な重度のうつ症状」と診断がつき、七か月入院しました。様々な治療を受けた結果、服薬量が減り、自転車に乗れるまでに回復し、実家に戻りました。

しかし、また再発。遠方での治療を受け回復した後、に再発したことで、落胆した家族との関係は非常に悪くなりました。私の闘病に長年付き合ひ、経済的な負担

もあり、家族も疲弊し調子を崩していました。

生きている辛さから「イエス様、ごめんなさい」と言って自殺を図りました。二回目の自殺企図でした。この時も助かり、救急病院で覚悟するよう言われた後遺症も残りませんでした。今度は精神病院の閉鎖病棟に入院となりました。

「信仰をもつ以前に、イエス様に出会うための試練ならわかるのに、救われた後で何故こんな辛い目に遭うのだろう」病棟の公衆電話から、泣きながら宣教師さんに電話をかけました。

「聖書はこう言っているよ。『彼はいたんだ。』」聖書の詩篇を讀むといいよ。ダビデも考えられないほどの悩みの中にいたよ」と話してくれました。後に、そのみことばはマタイの福音書12章20節（イザヤ書42章3節の引用）の一部とわかりました。

五か月入院し、頭の働きも判断力も悪く、買い物や料

理はもちろん、時間の逆算、小銭を数える…生活に必要な多くの事ができなくなったまま退院となりました。

独居生活と祈りの日々

主治医の指示のもと、退院後は金銭的、物理的、精神的…一切の協力を受けないで家族から自立し、訪問看護師さんやヘルパーさんの助けを借り、病院の近くで独居を始めることになりました。既に三十六歳、東京で発病して十年経っていました。

通院日は何とか起きて着替えて行き、後は殆ど寝たきり。歯磨き、ごみ出し、銀行ATMに行くのがやっと。手足をどう動かしたらいいか迷う事も度々。イエス様に「わからなくなりました。次はどうしたらよいですか？」と祈り生活しました。今思うと、買い物メモを作る、ハガキをポストに出すといった些細なことも祈ってから行なう習慣がついたので、私には必要な時でした。私と同じ気持ちの人が聖書にもいました。

ました。

いろいろな事ができなくなり私は嘆いても、神様は聖書でこう語っていました。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。…
（イザヤ43・4）の一部

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」
（2コリント12・9）

その後、ヨブは口を開いて自分の生まれた日をのろった。…なぜ、私は、胎から出たとき、死ななかったのか。なぜ、私は、生まれ出たとき、息絶えなかったのか。…なぜ、光が与えられるのだろう。

（ヨブ3・1、11、23）

私の涙は、昼も夜も、私の食べ物でした。

私の神よ。私のたましいは御前に絶望しています。

（詩篇42・3、6）

これまでの二度の自殺企図が助かった経験から、何をやっても神様の時でなければ死ねないことを知りました。この事は、後に友人が自殺を図った時、「もっとこうしておけば良かった」という自責の念から解放してくれました。また覚悟するように言われていた後遺症が残らなかったことを有難く思い、あらゆる手段を講じ自分自身を自殺から守ろうと思えるようになり

「人間を殺すこと＝自殺」は大きな罪とわかっていても、症状のため「私は生まれなければよかった。死にたい」という気持ちに度々なりました。気がつくとな自分の病状に基づく感情や考えを優先していて、これは私の罪の性質そのものです。同じ罪を繰り返す私のために、イエス様が十字架で死んでくださり罪が赦されたこと

13人の証し

Unser Herr lebt

と、内住の聖霊が助けてくださることに、その都度感謝しました。

サタンは巧妙で「イエス様から目を離しているから落ち込むのだ。うつ病はあなたの不信仰が原因だ」と話をすり替え、自分を見つめ嘆くように仕向けてきます。でも無視すればいいだけで、悲しい気持ちをありのままイエス様に向かって話せばよいと知りました。

殺してはならない。

(出エジプト20・13)

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。

(ヘブル12・2)

回復の始まり

イエスは彼が伏せているのを見、それがもう長い間のことなのを知って、彼に言われた。「よくなりたい

か。」 (ヨハネ5・6)

ある時、「良くなりたいです」とはつきりイエス様に祈っていないことに気づき、祈り始めると、少しずつよくなり始めました。

閉鎖病棟の時から主治医はノン・クリスチャン(クリスチャンでない人)ですが「私は愛されています。赦されています。感謝します。自殺しません」と何度も声に出して言われました。声に出すことが大切なのだそうです。私が聖書の信仰を持っていると知り、「聖書の神様にお祈りしなさい。クリスチャンの兄弟姉妹に相談しなさい」とも言ってくれました。再入院した閉鎖病棟の中へお見舞いに来て、共に祈ってくださいった姉妹もいました。

うつ病の友達は「トイレに行けたことでも、目が見えることでも、どんなことでもいい。今日できていることを声に出して感謝して」とアドバイスしてくれ、実行し

ました。そうやって一日一日が過ぎ、三回目の自殺企図には至らず今日まで守られました。

日曜礼拝にも行けるようになりました。松山キリスト集会では礼拝の後、毎週茶話会をします。その時の準備、後片付けのお手伝いなど、毎週同じ場所で同じ動作を何年も繰り返すことは、よいリハビリになりました。

バイブルキャンプは訓練を兼ね宿泊で参加。一泊分の荷造りをヘルパーさんに十年間一緒に練習してもらい、一人でできるようになりました。

家族の祝福を祈り始めると、家族もバイブルキャンプや礼拝に再び来るようになり、交流が増え始めました！誕生日やクリスマスに、妹から聖書のみことばの書かれたカードが届いた時は嬉しかったです！今は食事や祈り、日曜礼拝を共にする機会が増えました。感謝です。

コロナ禍と飛躍的な回復

13人の証し

Unser Herr lebt

二〇二〇年から数年の新型コロナの自粛要請が、私のうつ病を飛躍的に良くします。

それまでは「今日も着替えられず、散歩に行けなかった」と落ち込む日が、週に四日以上あったのが、「外出は控えて、自宅にいて欲しい」とお願いされているのです。堂々と家に引きこもってもいいのです。精神的にとても楽になりました。その上、給付金もあり、経済的に大変な私もスマホを買えました。遠方のために電話で参加していた祈り会は、全員が自宅からアプリを使ったかたちに変り、私も、スマホデビューで更に便利に祈り会へも参加できるようになりました。

日曜礼拝はYouTube配信で参加。信仰に関する動画や音声はスマホで視聴。聖書を読み祈る時間も増え、イエス様と二人だけの時が増えました。短大のアメリカ人の先生がくれたみことば「嬉しい心は良い薬」(箴言17・22の一部 英語直訳)の通り、楽しく嬉しくなることを心がけました。

またインターネットを通して全国に趣味友達ができ、親しい姉妹が、私の趣味友達の数人と会ったことがあるとわかり、その姉妹と一緒に趣味友達の救いを祈るようになりました。

私は喘息や医薬品のアレルギーがあるため、人と会うことについて内科の先生からは厳しく制限されましたが、スマホを活用できたので辛く感じず、楽しく充実した自粛生活を送れました。少しずつ散歩に行けるようになり、体力や調子が戻り始めました。

インターネットを通して与えられた趣味友達は、同世代のうつ病ではない人々や、フルタイムで働く人々と接する久々の機会になり、彼らの考え方に触れることで、私のうつになりやすい思考の癖に気づき、気楽にシンプルにものごとを考えるようになり、後悔にとらわれなくなっていました。

五十歳前後の友人達をみて、「ちょうど両親がその年

の頃、病気になって東京から帰ってきた私を迎えフォローしてくれていたのだ」と両親への感謝の気持ちが湧くようになり、妹にも、負担や心労をかけていたと悔い改めました。

兄弟姉妹、各科の主治医、うつ病の友達、趣味友達などの私への様々なアドバイスは全員同じ内容で、私は迷う必要がありませんでした。また皆さんが口で言うだけでなく、実行できるような用具を無料で送ってくれ、車で送迎し、遠方から会いに来、できない時は励まし、できたら褒めて共に喜び、時には叱り、ひたすら話をきいて寄り添ってくださいました。こうして私が心も体も霊的にも回復するように、イエス様が愛と笑顔に満ち、適切な対応ができる人達の中に私を置いて、悲しい日ものちと祝福を選ぶよう、心に光を与え続けてくださる恵みを感謝しています。

私は、きょう、あなたがたに対して天と地とを、証人

に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいを、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。

(申命記 30・19)

五十歳を過ぎて、短時間パートですが、なんと二十年前に一般企業へアルバイトに行けるようになりました！今もその職場で勤務しています。イエス様は、「良くなりたい」という私の祈りにすぐに答えるのではなく、数年経ってから少しずつ答えてくださっています。今もできないことがたくさんありますが、イエス様は必ず助けてくださるでしょう。

今はイエス様と周りの方々に感謝をし、まだイエス様を知らない周りの方々の救いと祝福を祈りつつ、聖書に次のように書かれている再臨を待ち望み、生活しています。

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの

響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。

このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。(1テサロニケ 4・16、17)

イエスは答えて言われた。「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」(ヨハネ 13・7)

これまで十年以上、どんな時も、悲しい時は泣きながらでも毎朝、声に出して歌っている「日々の歌」14番の歌詞を紹介します。

感謝します この恵みに
主イエスがくださる 贈り物に

私達の必要を 満たしてください 主イエスよ
いつも耳を そばだてて 私の祈りを 聞かれる
憂い、悩み、罪咎を解き放つお方 主イエスよ

一粒で二度美味しい

藤田清子

「一粒で二度美味しい」という言葉を聞いたことがあります。ですが、まさしく私たちが集う松山キリスト教会の交わりのことだと感じています。日曜礼拝には全国から、福音メッセージを語ってくださる主にある兄弟が来られ、聖書の解き明かしをしてくださいます。これが一度目の美味しいあじわい、昼食後に白水台にある、松山キリスト教会に集われる姉妹宅で芳醇な香りのコーヒーと果物、ケーキをいただきますながら、メッセンジャーの兄弟との交わりを持っています。これが二度目の味

わいです。語られた福音メッセージの中で少しわからない点があれば、詳しく教えていただけることがあったり、兄弟姉妹の祈りの課題、個人的に与えられている苦しみや悩みを打ち明け合っております。

このように松山キリスト教会は、毎週、深く霊と肉の糧をあふれるばかり!! いただいています。私にとって、何ものにもかえがたい主の恵みをいただいています。三十五年前に、苦しみの中、当時、軽井沢であったバイブルキャンプでベック兄にお目にかかり、主イエス様を信じ、救いの確信をいただいて今日に至っています。今は毎週一時間半かけて車を運転して礼拝に集わせていただいています。八十一歳になった現在、体の老化も覚えますが、一回でも多くこの至福の時間を与えてくださいと主に願っています。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあ

げます。

(マタイ11・28)

尚、救われた後の私の証しは、ドイツと松山で行なわれた「喜びの集い」でしておりますので、今回は現状を証しさせていただきました。私にとって、あらゆる面で、助け手となってくださっている兄弟姉妹を主が与えてくださっている事、これ以上の恵みはありません。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。

(詩篇119・71)

だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、主はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしは

あなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いて、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。わたしが、あなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。わたしは、エジプトをあなたの身代金とし、クシュとセバをあなたの代わりとする。わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。だからわたしは人をあなたの代わりにし、国民をあなたのいのちの代わりにするのだ。恐れるな。わたしがあなたとともにいるからだ。わたしは東から、あなたの子孫を来させ、西から、あなたを集める。

(イザヤ43・1-5)

私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。

(詩篇16・8)

13人の証し

Unser Herr lebt

主とともに歩む日々

藤田 佳美

私は昭和二十六年八月二十九日に愛媛の山間部で生まれました。幼少の頃は、母が教員なので昼間は一人で過ごしていました。

父の存在は余り記憶にありません。

縁側の下にわとりの鶏を見たり、谷川で小さいカニを捕まえたり、固い梨の実をかじったりしていました。

殺風景な和室の筆筒たんすの上に貼ってあった肖像画をいつも「この人は何者なのか」という気持ちで見っていました。後にゲッセマネで祈られているイエス・キリストであることがわかりました。

幼稚園の帰り、しもやけで痛みを感じていると、氷の張った水瓶みずがめに朱い手袋が浮いていました。

その朱色の可愛さに目を見張り喜びました。

「神様だ！ 神様からいただいたのだ！」「ありがとうございます

わたしは、『わたしはある。』という者である。

(出エジプト3・14)

二〇二四年十一月、松山市の記録的大雨による水害後、街が大きく変わり、住まいを失う恐怖と闘っている現在も「わたしはある」と言ってくくださる方がいてくださるのだからと悲しみや苦しみを乗り越えて行こうと勇気づけられています。

誤りがあれば軌道修正してください。イエス様お一人だけが、あらゆる問題の解決です。どうか日々導いてください。あなた様のみこころにかなう道を歩ませてください。

あなた様だけに、ご栄光がありますように。

ございます」とただ感謝したことを忘れられません。今日まで困難の多い人生を過して来ましたが、その度に助けられました。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。
(詩篇103・2)

砂浜の砂粒のように数えきれないほどの恵みをいただいています。

現在も厳しい現実の中にあっても、励ましてくださっています。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

(イザヤ41・10)

暗闇から光へ

——イエス様との出会い

城本 恵美子

私が初めてイエス様と出会ったのは中学一年生の時でした。同じクラスで委員長をしていた人が、何故か劣等生の私のような者を教会へ誘ってくれました。そこはカトリックの教会で、その当時珍しかったスペイン人の神父さんがいてイエス様やマリヤ様の像があり、ステンドグラスの光の中で女の人がベールをかぶって祈っている光景は、私にとっては全くの異次元空間、別世界でした。そんな素敵な雰囲気あふみに憧れて、神様のこともわからないまましばらくの間一緒に行きましたが、二年生になりクラスが分れるとともに自然と遠のいてしまい、それ以後神様のことや宗教的なことなど考えることもなく過ごしました。

私は兄二人、姉三人の一番下に育ち本当にわがままで、自己中心的な者でした。そのくせ、人にはよく見られたいと外面ばかりを気にする弱くて気の小さい者でした。また、これといった信念も何も持っていないのでしたから、人に影響されやすい本当に愚かな者でした。

中学で父が亡くなり経済的にも困難だった母や兄姉たちの苦勞をわかろうとせずつ、心配のかけどうしでした。

高校卒業後は都会に憧れて大阪や東京で就職しそこで結婚もしましたが、そのような自分勝手な者ですから恥ずかしい話、すぐに失敗に終わってしまつて、当時三歳の息子を連れて松山へ帰つてきました。東京にいたころ、三浦綾子さんの『道ありき』という本に出会いました。今までの自分の生き方、考え方と全く違う、何か聖いものがその本の中にあるように思えて一晩で読んでしまうほど感動しました。けれどもその気持ちだけで、聖書を読んでみようとか教会に行つてみようとい

かいう気持ちにはなりませんでした。

松山へ帰つてから、借りていたアパートのすぐ近くに小さな教会があり、ある日新聞の折り込みチラシに特別伝道集会の案内が入ってきました。恵み深い神様は私のような者をもあわれんでくださつて、行つてみたいという気持ちを起こさせその伝道集会へと導いてくださいました。夜の集会でしたが三日間、幼い息子を連れて出席しました。メッセージの内容は覚えていませんが、最終日三日目の夜、講師の先生が「あなたは神様の前に罪人です」と言つて誰へともなく指をさされたのが、まるで私一人のように感じて、何故かその時、自分が罪人だということがわかりました。

それまで私は、自分が有形無形のいろいろな罪、あんな事があった、こんな事もした、あんなことも思つた等々一つ一つお話しするとあきれ返るような様々な罪、自分でどうすることもできない醜い心の暗闇を持つて

いることを知っていました。周りや人のせいにして、罪はあつても「罪人」だとは思つていませんでした。

私という人間そのものは、真面目ではないけれども人好しで、人情があつて、本質的にはそんなに悪い人間ではない。白・黒・灰色と分けるなら灰色ぐらいで、むしろいい人間だと思つていましたので、罪はあつても罪人だということがわかつていませんでした。

でもその時、神様は私が罪人だと示してくださいました。不思議なように電気で撃たれたようにわかりました。表面はどんなに取り繕つていても心の中では自分が一番かわいくて、もしレントゲンで自分の心の中を写し出されたとしたら、とても顔を上げていられないような恥ずべき自分がいました。

後で知ったことですが、第一テモテ1章15節で著者のパウロは「私は罪人のかしらです」と言っています。私も、聖書を読めば読むほど自分ほど罪深くどうしようもない人間は他にいないと思います。けれども、イエス

様を信じる信仰によつて義と認められ、聖く、傷なく、非難されるところのない者として神様の前に立つことができる」と約束されていますので本当に感謝です。

「神は愛なり」という賛美が終わりに歌われたのですが、「汚れ果てし我さえも愛したもう神は愛なり」というところが涙で歌うことができませんでした。そこは、暈敷きの部屋にパイプ椅子を並べただけの小さな開拓教会でした。

それから求めて熱心に教会へ通い、三か月程して牧師先生より受洗のお話がありました。が、「まだ洗礼を受けれられるような資格がないので」とお断りしたところ、そういう人こそ資格があると言つていただき、導いていただいて、イエス様の十字架は私の罪のためだったと信じることができました。

マタイ9章2節「子よ、心安かれ、汝の罪ゆるされた」(文語訳)。第2コリント5章17節「人もし基督に在

らば新たに造られたる者なり、古きは既に過ぎ去り、見よ新しくなりたり」(文語訳)。この二つのみことばをいただいで一九七五年(昭和五十年)十一月三十日、受洗の恵みにあずかりました。二十九歳十か月の時でした。喜びと平安と感謝でいっぱいでした。神様を知らないときはいつも不安で、この世の楽しみや虚しいものばかりを追い求め、揺れ動いていました。この聖書が唯一絶対の真理だという確信を持つ者へと変えていただきました。

その後、新しい出会いが与えられて娘、愛を授かり、現在に至っています。

今年(二〇二五年)で七十九歳となり、救われてから約半世紀の時が流れました。長いようで短かったこの間に本当に色々な出来事がありました。

信仰を持ったからといって決していいことばかりではなく、荒海に放り出されるような辛くて苦しいところ

も通りました。あれほど熱心だった信仰も長いばかりで決して誇れるような信仰生活ではなく、教会を離れていた時期もありました。そんないいかげんな私のような者でも神様の憐みは尽きることがなく、今日までこうして遅々とした歩みではありますが、暗闇から光へ、滅びから永遠の命へと救い出してくださいました。イエス様を信じる信仰が与えられています。私の人生の中で一番の幸せは、イエス様と出会い信じるのが出来た事です。そして夫が救われ、娘が同じ信仰に導かれていることが何よりも嬉しく感謝しています。まだ救われていない家族・親族や大切な人々の救いを心から祈っています。

この年になっても悔い改めることばかり多くて、クリスチャンになったからといって素晴らしい人格に生まれ変わるといふことはいまだなく、生まれ持った性質は変わっていません。主人からも「お前は本当にクリスチャンか」と言われることがあります。こんな私です

からイエス様が必要で、イエス様にすがりついていなければ一歩も歩けません。只々神様のあわれみにすがることができる者です。

残された時があとどのくらいかわかりませんが、私のような者のために十字架の上でいのちを捨ててくださったイエス様に、終わりの日まで従い続けていきたくと願っています。

これらのことをあかしする方がこう言われる。「しかし。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。
(黙示録 22・20)

父の残した言葉

南尚佳

私は一九九三年五月三日に御代田の西軽井沢国際福

音センターで洗礼を受けました。私がいつも祈っていることは家族、親族の救いです。
夏休みは毎年、両親(父量雄、母美津子)を連れて、御代田の夏のバイブル・キャンプに参加し、兄弟の家族や叔母、いとこたちも合流するのが恒例でした。また、日曜日は両親を連れて松山キリスト集会に参加していました。

父は二〇一三年の松山キャンプでの洗礼を自ら希望し、四月二十日、兄弟姉妹の祈りの中、ベック兄によって父の洗礼式が行なわれました。

今思えば、その頃から両親の認知機能の低下が始まっていたようです。母は進行性肺がんが見つかり、約一か月の闘病で召天し、その後、父は独居となりました。父の認知症は徐々に進行し、また、腎臓がんが見つかりました。二〇一九年八月の御代田での夏の「喜びの集い」に参加した後、腎臓がんの手術、肺転移には抗癌剤治療を行いました。退院後、認知症が急速に進行し、再

13人の証し

Unser Herr lebt

び入院しました。コロナパンデミックのため、病院への面会も困難になり、私は父に何もできませんでしたが、主は絶えず見守って導いてくださったと思います。認知症と腎臓がんの肺転移が進行し、二〇二〇年十一月末に召天しました。

両親は、信仰について、ほとんど語ることもなく召されましたが、父は生前、洗礼を受けた後だと思うのですが、「蒔かぬ種は生えぬ」とひと言だけはつきり言いました。大切な家族、親族への福音の種まきをしなさいと私への父の遺言であつたかと思います。その言葉はいつも私の心の真ん中にあります。これからも、家族や親族の救いをただ祈るのみです。

両親は、多くの集会の兄弟姉妹の祈りによって主に導かれ、病を負っても主との豊かな交わりの中で幸せであつたと思います。主とキリスト集会の兄弟姉妹に心から感謝です。

何も思い煩わないうで、あらゆるばあいに、感謝をもつてささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあつて守ってくれます。

(ピリピ4・6、7)

イエス様とともに

皆見 真知子

西条市に住み、二か月に一度の祈り会が持たれて間もなく二年になります。以前私が洗礼の恵みにあずかった時に立ち会ってくれた主人が、帰りの車の中で次の俳句が書かれた紙片を渡してくれました。

「喜びの洗礼の日の花水木」

二〇〇六年四月二十二日 松山喜びの集いにて

皆見 耕一

最近、祈り会の後の交わりに、主人が加わってくれるようになり主の恵みに感謝しております。

主のお約束

光藤 絢子

私は二十九歳の時に、当時住んでいた町田市の教会で、牧師先生がお読みになった「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたを休ませてあげます。」(マタイ11・28)のみことばでイエス様に心の中でお会いし、信じる事が出来ました。

その後東京から夫と母の郷里松山に帰り、初めての

地での家族七人の忙しい生活のなかで、私はいつの間にかイエス様を生活の隅に置いてしまっていました。

ところが松山での生活が十五年を過ぎた頃、順調に見えていた生活に問題が起き始めました。夫が勤務先の病院で脳出血で倒れ、東京で社会人として生活していた長女のめぐみが挫折をして松山に帰り、さらに中学生だった次女しのぶが拒食症で学校に行けないという、三つの事がほぼ同時期に起こりました。

夫はカトリック系の中高一貫校の高三の時に洗礼を受けていたので、二人でどこかの教会に行く事を提案しましたが、かないませんでした。

そんな時、何年も音信不通になっていた友人から電話があり、彼女が洗礼を受けた事、吉祥寺キリスト教会に集っている事などを聞き、私が「もっと知りたい」と言いましたらすぐにたくさんの方の集会の本が送られてきました。私は夢中になって次々と読むうちに「ベックさんには是非お会いしたい」と強く思いました。それから間

もなくして、松山で家庭集会があるとお知らせを頂き、しのぶと私はベックさんにお会いすることが出来ました。

そのあと直ぐに、ベックさんが岡山へ行かれた後だったと思いますが、お一人で我が家にいらしてください、夫やめぐみとも交わってくださいました。その後、東京で学生生活を送っていた長男も小金井の家庭集会でベックさんとお会い出来、あまりの速さに驚きの連続でした。

そして私たち夫婦はベックさんを通して「生きておられるイエス様」に再びお会いすることが出来ました。現状は何も変わらないのですが、次第に私は喜びでいっぱいになりました。当時、松山では礼拝が持たれていませんでしたので、坂出^{さかいで}まで行ったこともありまして。ところがこの十か月後、うつ状態から良くなっていくように見えていた長女のめぐみが二十六歳の誕生日を迎えて間もなく、短い生涯を閉じました。葬儀にいらし

う」との強い思いが与えられました。

その三か月後に行なわれた松山でのキャンプでベックさんから突然「あなたたちの家で礼拝をしたらどうですか?」と言われ、夫はただ黙ってしまいました。私は「無理です。出来ません」と必死で申し上げました。「何もしなくていいんだよ。ただ、雨露^{あめつゆ}のしのげる部屋を提供するだけだよ」がベックさんのお答えでした。

それからあつという間に、イエス様の事も、キリスト集会の事も良く知らない私たちの家で、礼拝、福音集会、食後の交わり会が月に二回、直ぐに毎月持たれるようになりました。吉祥寺キリスト集会の皆さんに祈られていたことを後で知りました。

メッセンジャーの方々が東京、関西、四国の各地から毎回いらしてください、「松山は四国で一番大きな町だから、悩んでいる人もたくさんいるでしょう?」とベックさんが言われたとおり色々な問題をお持ちの方々が大勢見えました。ベックさんの「何もしなくていいんだ

てくださったベックさんに「どうしてこんなことが…」としか言えない私の手を取って、ベックさんは「ぜんぶイエス様だよ…」としかおっしゃいませんでした。

葬儀後のあわただしい日々が過ぎ去り、日常生活に戻ったのですが、まだ暗闇^{くらやみ}に覆^おわれていた私に、ある時、葬儀の式次第に載っていた夫の選んだみことば、「主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」(ヨブ1:21)と「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしはあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません」(ヨハネ14:27)が心に迫ってきました。式次第を手に取り、この二つのみことばを繰り返し読んでいくうちに「わたしの平安を与えます。…世が与えるのとは違います…」(ヨハネ14:27)のみことばが暗闇のなかの小さな光のように感じられ「主がお約束してくださいとあっておられるのだから、このみことばをしっかりと握り締めて待つていよ

よ…」の言葉はその後の集会生活の中で私たち夫婦がいつも立ち返る原点でした。今思えば、「なさるのはイエス様だよ」とベックさんは言葉には出されませんでした。が、仰^{おほ}つていらしていたのかもしれない。こうして、わからないことばかりの私たちでしたが、「イエス様の集会」を第一とする生活が始まり、それまでの、何よりも仕事を愛していた夫の生活は大きく変えられて行きました。

早いもので松山キリスト集会が起こされて今年で三十年になります。この間、私たち家族は松山キリスト集会の中に置かれたことでたくさんの恵みを頂きました。特に戦争未亡人として寂しく孤独であった母が、隣室から流れてくる賛美歌を聞く内に自然に礼拝、福音集会に参加するようになり、「息子と同じところに行きたい」と「高知喜びの集い」で洗礼に導かれた事、また横浜在住の母の姪、我家の次女しのぶ、三女いのりが救わ

れた事、更には夫の中学、高校の後輩である青年が救われた事。高校で寮生活をしていた彼が土曜日から泊まりがけで来ては礼拝に度々参加。その数年後、医師として歩み始めた彼が、洗礼に導かれた時には松山キリスト集会のみんなが本当に喜びました。

夫の退職に伴い、二十八年住み慣れた県の公社を出ることになり、これを機に礼拝場所を公の所に移すことになった時も、松山の中心地の施設が礼拝場所としてすぐに備えられました。

その後、夫が七十二歳の時に閉塞性動脈硬化症になり、医師から突然、右大腿部の切断を告げられた時には、かつて長女の葬儀の時にベックさんに言われた「全部イエス様だよ」の言葉と「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」(イザヤ30・15)がからだ中を駆け巡り「今までもそうだった様に、主は最善を成してくださいさるから大丈夫」とひとりで病室で落ち着いていられたのも、

一人ではなくイエス様が共にいてくださったからだと思えます。

夫の十か月に及ぶ長い入院生活の中で、礼拝、集会を終えた兄弟姉妹方が必ず病室に立ち寄ってください、笑い声のあふれる賑やかな病室となり、看護婦さんたちがみなニコニコして立ち去って行きました。始まるうとしていた介護の生活に私は何の不安も感じることはありませんでした。

退院後、車椅子の生活が始まってからも毎週礼拝に参加出来、みんなに助けて頂きながら、私たちが「亀田バス」と呼んでいる、亀田兄運転の十人乗りの車で、以前と同じ様に御代田、岡山、広島、高知の「喜びの集い」に参加、さらには北陸、関西、九州の観光地にも連れ出してくださいさったことなど、普通では考えられないような介護生活でした。

けれども、沢山の助けが必要となった夫と向き合う中で、私は自分ではどうする事も出来ない私の本当の

心の有り様を多く見せられることになりました。忍耐強い夫が「ただ同情だけしてくれたらいい」と言った言葉を受け止めきれませんでした。辛かったあの時々私のこころない言動をイエス様はすべて見ておられ、はじめ私のそばにいつもいてくださいました。身体的にも決して穏やかな日ばかりではなかった夫は二〇一九年の六月、七十九歳の誕生日の朝、平安のうちに召されました。車椅子の生活ではありましたが、七年の間、毎日曜日に礼拝に行くことが出来、みんなの笑顔に会え、みことばを頂き、お茶の交わりも備えてくださった主に感謝しかありません。

主が導いてくださってここまで歩んで来れた小さな群れですが、ここ数年、高齢化により集えない兄弟もおられ、ますます小さな群れになりつつあります。そんな中でも一年前から日曜日の礼拝、福音集会、食後の交わり会の後で以前のように、ベックさんのお書きになった本、『絶えず祈れ』や『神の愛』の輪読や小さな

祈り会を主が備えてくださっています。これからも主の守りと導きを祈りながらみんなで歩めたらと願っております。

あなたは私を多くの苦しみと悩みに、会わせなさいましたが、私を再び生き返らせ、地の深みから、再び私を引き上げてくださいます。(詩篇71・20)

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。(ヘブル13・5)

13人の証し

Unser Herr lebt

生ける神のしもべダニエル（1）

ゴットホルド・ベック

今回からダニエルを通してまことの主の証し人について考えてみたいと思います。ダニエル書6章1節〜23節を学びたいと思いますが、はじめに16節と19節と22節を見てみましょう。

そこで、王が命令を出すと、ダニエルは連れ出され、獅子の穴に投げ込まれた。王はダニエルに話しかけて言った。「あなたがいつも仕えている神が、あなたをお救いになるように。…」

王は夜明けに日が輝き出すとすぐ、獅子の穴へ急いで行った。その穴に近づくと、王は悲痛な声でダニエルに呼びかけ、ダニエルに言った。「生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神は、あなたを獅子か

ら救うことができたか。」すると、ダニエルは王に答えた。「王さま。永遠に生きられますように。私の神は御使いを送り、獅子の口をふさいでくださったので、獅子は私に何の害も加えませんでした。それは私に罪のないことが神の前に認められたからです。王よ。私はあなたにも、何も悪いことをしていません。」

（ダニエル6・16、19〜22）

このダニエルは、本当に模範的な証し人だったと言えます。この世が一番必要としているのは、このようにイエス様を証しする人々ではないでしょうか。

イエス様を信じている人がはつきりと主の側に立つと、周りの人々は必ず、「どうしてそうなのだろうか？」

と思うようになり、心を開きます。その人が心配から解放されているのを見て、「それはなぜだろう？」と、だれでも考えざるを得なくなるのではないのでしょうか。

ある兄弟が新しく勤務するようになった病院で、同僚である医者のお兄様が、イエス様を心から受け容れるようになったそうです。というのは、その兄弟ご夫婦の歓迎会の席でその兄弟の妻が自己紹介するときにはつきり「私たちはイエス様のものです。イエス様を証しするために来たのです」と話したのです。すると、その場にいたある医者の奥様が驚いて兄弟に打ち明けたそうです。その人は十年間教会に行っているのですが、「救い」とは何であるかがさっぱり分かっていませんでしたし、礼拝は単なる形式的なことにすぎないと思っていたようです。全く自由がなく、喜びがなく、平安もないと言われたそうです。そこへ救いの確信を持った姉妹が現われ、そのわずかな証しを聞いて心を開き、「今から、あなたがたと一緒に主に従いたい」と言われたということです。

これから見るダニエルという人も、まったく同じような人だったのです。彼は約二千六百年前に生きていた、本当に主の側に立つ人でした。「私はまことの神に仕えている」、「主は私のものです」と彼はどこへ行っても証ししたのです。

私たち聖徒の証しを通して主は働かれます。

イエス様は、「あなたがたは…わたしの証人となる」（使徒1・8）と言われたのです。証人は当然、自分で経験したことを証しします。自分で経験していないことを証しすれば偽善者になります。

ダニエルは本当の意味での主の証人でした。どうしてもそうなれたのでしょうか。彼は主のご栄光を体験的に知り、拝することができたからです。私たちはいったいどのような状態にいるとき、もつともすばらしく主のご栄光を拝することができるのでしょうか。

ダニエルが獅子の穴に入れられたように、真つ暗闇で悪魔が勝利を握っているかのように思われるどん底に落ちたとき、一番すばらしく主を知ることができ、主

のご栄光を拝することができのです。主は、私たちがダニエルのように少しの妥協もすることなく、ひたすら主にだけ仕え、奇跡を経験する人にしたいと思っておられるのです。

すこし、ダニエルが生きていた頃の歴史的背景を見てみましょう。ちょうどその頃は、それまで世界歴史の中心に位置していたユダヤ人たちが主から離れてしまつて、自己中心になり、主に従おうと思わなくなつていたときでした。彼らが主から目を離してしまつたために、いわゆる歴史の中心がユダヤ人から異邦人に移つていくという、非常に重大なときでした。神の民であるユダヤ人が神から斥けられ、神を知らない異邦の国々が大切にされるようになったのです。いわゆる「異邦人の時」は紀元前六〇六年、バビロンの世界制覇によって始められました。ある意味でこの「異邦人の時」は今日まで続いているのです。ユダヤ人は今もまだ世界の中心になっていません。それどころか世界中の多くの

した。やがてネブカデネザル王に非常に愛されるようになり後には非常に高い政治的地位を与えられました。次の王ベルシャツアルはダニエルを、国の第三番目の権力者の位に就かせました(参照ダニエル5・29)。そしてこのベルシャツアルの跡継ぎ、ダリヨスも、ダニエルを登用し、国の最高の司に任命したのです(参照ダニエル6・3)。捕囚の身の外国人でありながら、このように成功するのは考えられないことです。

しかしダニエルがそれほどまでに用いられたことで、当然多くの人々に妬まれる結果になってしまいました。「あの外国人を何とかして失脚させよう」と思う者たちが次々と出て来たのです。彼らは手段を選ばず、ダニエルを陥れようとしたましたが、ダニエルには隙がなく「何の口実も欠点も見つけることができなかった」(ダニエル6・4)と、書かれています。彼は熱心に、真面目に、怠ることなく務めを全うしていたのです。神の前だけではなく、人間の前にも透き通った性格の持ち主であり、彼は本当に主の光のうを歩む者だったのです。いくら

生ける神のしもべダニエル(1)

人々がユダヤ人を批判しています。しかしそれは99%、根拠のない批判です。彼らはテレビを観たり、ラジオを聴いたり、新聞を読んだりして「やつぱりイスラエルは悪い」と判断しますが、それらはとんでもない嘘、偽りで、偏見に満ちています。ユダヤ人はあらゆる国々から妬まれるようになっており、攻撃されているのです。

しかし聖書を根拠に言えば、もちろんイスラエルこそが将来の世界の中心になります。他の国々が将来どういうふうになるかはだれにも分かりませんが、聖書によれば間違いないイスラエルが世界の中心になります。今の時代には考えられないことですが。

「異邦人の時」は、二千六百年前に始まりました。当時のバビロンの王、ネブカデネザル王が、エルサレムを包囲し、そしてイスラエル人の優秀な人々である王族、貴族を捕虜にし、自分の国バビロンに連れ帰りました。その中にダニエルという少年もいたわけです。

ダニエルは王宮に召し入れられ、そこで教育を受けま

疑いをかけようと思つても、それは無理でした。

ところが悪魔はダニエルに敵対する人たちを用いて、一つの計画を廻らしました。「あのダニエルという者はユダヤ人で、私たちの国の者ではない。彼は唯一の神を拝する者で、われわれの神を無視し、宮や寺を訪ねず、見向きもしない。彼は毎日、いわゆる生ける神と言われる唯一の神を拝んでいる。だから彼を訴える口実となるよう王に一つの法律を設けさせよう」と国中の大臣や側近たちは申し合せて王にある進言をしたのです。「今から三十日間、王よ、あなた以外に、いかなる神にも人にも、祈願をする者はだれでも、獅子の穴に投げ込まれると。王よ。今、その禁令を制定し、変更されることのないようにその文書に署名し、取り消しのできないメディアとベルシヤの法律のようになしてください。」(ダニエル6・7、8)。ダリヨス王は何もわからずに、その禁令の文書に署名しました。

これに対してダニエルは、どんな反応を示したのでしょうか。10節をみると、「ダニエルは、その文書の署名が

されたことを知って自分の家に帰った。——彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かってあいていた。——彼は、いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。」と書かれています。

ダニエルはこの新しく設けられた法律のことを聞いたとき、不安に思ったのでしょうか。絶望してしまったのでしょうか。慌てて友だちを呼んで、相談しようと思っただのでしょうか。あるいは、逃げて姿を消そうと思っただのでしょうか。

決してそうではありませんでした。彼は人間とは相談せず、いつものように、彼の神の前に祈り、感謝しました。私たちには及びもつかないすばらしい態度です。主の前に静まると、結局、今の目に見える世界は、大したものではない、主は天と地のすべてを支配しておられるお方だという確信が与えられます。

この法律の設けられたことも主が許されたこと。最終的には必ず主の栄光が現われ、自分にとっても最善であるとダニエルは祈りながら確信することができた

彼は身の危険を覚え、自分の高い地位を捨てて逃げ出すことももちろん出来たはずですが。そうするならば全能者なる神の証し人でなくなります。彼は部屋の窓を全部閉めて、誰も見ていないところで、小声でこっそりと祈ることもできたでしょう。しかし彼はそれもしませんでした。彼は、「自分は決して隠れた信者にはならない」と堅く心に決めていたからです。

ともにバビロンに囚われて来た同胞にとって、彼は何というすばらしい証しだったのでしょうか。大部分のユダヤ人はおそらく妥協したでしょう。自分の身の危険を感じたとき、曖昧な態度を取ったでしょう。けれどもダニエルは、主だけを見て、すべてを主にゆだねることができたのです。彼は王の権威の前に小さくなっていまませんでした。大胆に自分の仕える神の名を口にしました。「私は、生けるまことの神のしもべである」と彼は証ししたのです。彼はいったいどうしてこのように喜びに満ち証しをすることができたのでしょうか。それは彼が若いときから自分を主にゆだねていたから

生ける神のしもべダニエル（1）

からこそ、感謝し、主の御名をほめたたえ真心からの礼拝をささげることができたのです。

彼はいつものように祈り続けたのです。祈ることは確かに大切ですが、もっと大切なのは祈り続けることです。多くの人々は、「もう、どうせダメじゃないか」と諦めて途中で祈ることをやめてしまっています。しかしダニエルは祈り続けました。

ダニエルを妬む人たちは、ダニエルが神に祈ることを知っていたからこそ、王以外の者を拜んではならないという法令を作らせたのです。そしてダニエルが主の御前に祈っているところを、結局、人間の作った法律を破っているところを彼らは見つけました。

ダニエルは隠れた信者でいるよりは、死んだほうがよいと思っただけです。人間を恐れると、もう主を証しすることができません。人間は人間を恐れるか、あるいはまことの神を恐れるかのどちらかです。主を恐れることによって人間を恐れる恐れから完全に解放されます。これこそがダニエルの経験でした。

だと言えます。

しかし、ダニエルは捕らえられ、法令に従って処罰されることになりました。

そこで、王が命令を出すと、ダニエルは連れ出され、獅子の穴に投げ込まれた。王はダニエルに話しかけて言った。「あなたがいつも仕えている神が、あなたをお救いになるように。」
(ダニエル 6・16)

実は、ダニエルが救われるようにというのがダリヨス王の切なる願いでした。王は一晚中ダニエルのために断食し、夜明けに獅子の穴へ急ぎました。

その穴に近づくと、王は悲痛な声でダニエルに呼びかけ、ダニエルに言った。「生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神は、あなたを獅子から救うことができたか。」
(ダニエル 6・20)

ここで二回、16節と20節に、「いつも」ということばが出て来ます。たまにはではなく、時々でもない。ダニエルは「いつも」主に仕えていた者でした。仕える者の特徴とは、「私の思いではなく、あなたのみこころだけがなるように」、「どうしたらいいか分かりませんが、よろしくお願いします。教えてください」という態度をとり続けることです。

この王のダニエルに対する呼びかけは、本当にすばらしい証しではないでしょうか。「あなたがいつも仕えている神」、「生ける神のしもべダニエル」と、ダリヨス王は今までのダニエルをよく知っていたから、ダニエルの仕えている神が今も生きておられ、生ける神であると分かったのであり、この生ける神はダニエルを守ってください。王は認めざるを得なかったのです。

ダニエルは、「王に認められたい」という気持ちがあったのです。忠実に、真心から仕えること、これが彼の願いであり、切なる祈りでした。ダニエルは幼い

ときから主に心から仕え、いつも主のみこころを尋ねていたのです。結局それは彼の性格になってしまっていました。自分で考えたり、計画を立てたり、人と相談したりするのではなく、主の前に静まり、「主よ。教えてください。導いてください」と常に主に求める、そういう性格の持ち主になったのです。彼の心には幼いときから主を恐れる恐れがあったのです。主を恐れる必要性について聖書はたくさん語っています。主を恐れる者は導かれ、守られ、用いられます。

主に仕えることとは、もちろんダニエルにとっても決して簡単なことではありませんでした。ダニエルが住んでいたのは、異邦の国でした。イスラエルから連れて来られ、異邦の教育を受け、文学も異邦のものを学ばなければならなかったのです。しかしまことの神を恐れる恐れは、ダニエルに異邦のものと妥協することを避ける勇気と力を与えました。1章を読むとそれがはっきり分かります。

「王さまと同じ食べ物を食べなさい」と始めに命令さ

れましたが、「偶像にささげたものを私は絶対に食べません」と彼ははっきりとした態度を取ったのです。

彼は王に氣に入られようとは全然思いませんでした。ただ主なる神に喜ばれること、主なる神にだけ仕えようと彼は切に望んだのです。

私たちは食べたり飲んだりすることは、そんなに大切なことではないと考えるかもしれませんが、ダニエルにとって、主のことばを一つ残らず守るということは、かけがえのない大切なことでした。主なる神を心から畏れていた彼は、神のみことばに背くことはできなかったのです。

主のみことばの中には、いわゆる外面的なことが確かにたくさん書かれています。しかし、もし信仰者がダニエルの時代はそうだったが、今は時代が違う、だからこれは当てはまらないなどと、みことばを曲げて取るなら大変です。先日、ある男の人と少し話す機会があったのですが、彼は「神と悪魔とは友だちですよ」、「親しい関係があるよ」と言ったのです。さらに彼は「聖書なんて

そんなに大切なものじゃない」と言うのです。彼はもちろん喜びも平安もない顔付をしていました。まことに気の毒なことでした。たとえみことばをそのままで理解できないとしても、ピンと来なくても、信じなければ救いの確信がなくなります。確信がなければ救いの喜びもなくなります。

ダニエルは、「主のみことばは事実である。主ご自身も忠実なるお方である。主を信ずることとは、みことばに頼ることである」と確信していたので、あらゆる心配、恐れから解放されたのです。主である神に対する全き信頼と服従には、すばらしい豊かな神の恵みが伴います。ダニエル書1章15節、20節に次のように書かれています。

十日の終わりになると、彼らの顔色は、王の食べるごちそうを食べているどの少年よりも良く、からだも肥えていた。…

王が彼らに尋ねてみると、知恵と悟りのあらゆる面

で、彼らは国中のどんな呪法師、呪文師よりも十倍も
まさっているということがわかった。

(ダニエル1・15、20)

ダニエルとその友人の少年たちは、ほかのどの若者よりも健康にまさり、ほかのどんな人々よりも知恵と理解において十倍まさっていたと書かれています。これは確かに不思議なことです。主のなさった奇跡であり、主の祝福です。みことばに信頼し従い続けるためには、勇気が必要であることが分かります。この勇気は、いったいどこから出て来るのでしょうか。これは生まれるものではなく、祈りによって生まれるものです。祈りによって主と一つになることによってのみ、このような勇気が出て来るのです。

ここでは詳しい説明は省きますが、2章を見ると次のようなことが書かれています。すなわち知恵と理解力、主なる神の奥義を知る力も祈りによってのみ与えられるということです。

呪法師や呪文師は王さまの夢の解き明かしができませんでしたが、ダニエルはできたのです。どうして？
祈ったからです。主に尋ねたからです。

(次号に続く)



キリスト集会へのご案内

吉祥寺キリスト集会

【電話】 0422-21-8450 (集会所)
東京都 武蔵野市 吉祥寺 本町 4-9-11
〒180-0004

日曜礼拝・福音集会 10:30 / 18:30

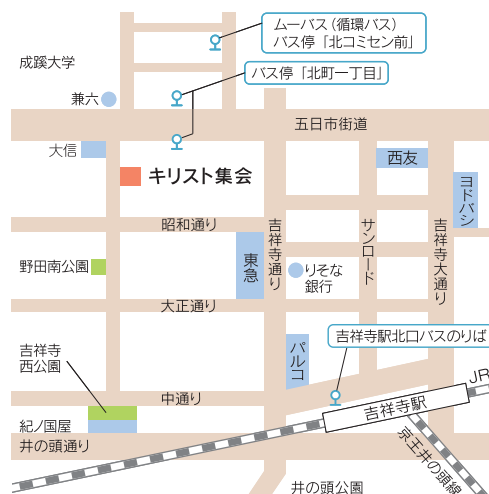
火曜学び会 11:00

木曜祈り会 19:00

子供日曜学校 9:30

中高生日曜クラス 9:30

【バス】 ご利用の方は、吉祥寺駅北口バスのりば
「1番のりば」「2番のりば」より乗車して
「北町一丁目」で下車してください。



牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。

いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。

みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によることばをもつてなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものではありません。

出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらさげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

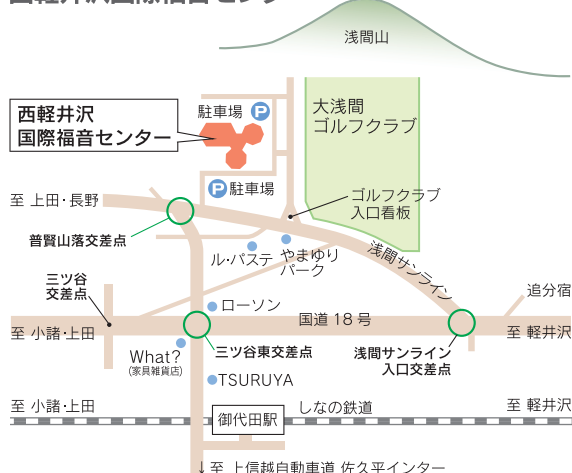
家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターははじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
【電話】 0267-32-6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
【電話】 0267-32-6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201

アクセス

【鉄道】

しなの鉄道で御代田駅下車。
タクシーで 約5分 (1000 円程度)
徒歩 約45分 = 3 Km

御代田駅へは東京駅より
北陸新幹線にて軽井沢駅下車、
しなの鉄道に乗り換えて三つ目
御代田駅で下車。

【車】

上信越自動車道
佐久平インター下車 約20分 (約7km)
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。



モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒とすることができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと - ヨハネの黙示録 (第1～4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ - 私たちは主のもの

証しシリーズ (第1～9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そここのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の实在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにもかも私たちが神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。



■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

主は生きておられる 第67号

定価100円（税込み）2026年1月18日発行

編集スタッフ	岩本秀造 黒澤錬二 鈴木力 芳我幸雄 福留伸子 牧野正士
写真	鈴木力 芳我幸雄
印刷・制作	ニューライフ・ミニストリーズ 新生宣教団
題字デザイン	飯守格太郎
発行所	キリスト集会

キリスト集会のホームページ <http://christ-shukai.net/>

出版本を購入されたい方、お問い合わせ webmaster@christ-shukai.net

また、キリスト集会のホームページの「出版物」のサイトからもメールにてお問い合わせが可能です。

本証し集でよく使われる言葉は以下のような意味です。

「兄弟姉妹」

イエス・キリストを救い主と信じる者は神の家族であり、尊敬と親しみを込めて、男性には「兄弟」、女性には「姉妹」と付けて、互いに呼びかわしております。

神のみことろを行なう人はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。（マルコ3・35）

「交わり」

イエス・キリストを救い主と信じる者たちが、聖書のみことばを土台に、ささえ合い、励まし合うことを言います。

私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。
(1ヨハネ1・3)